

本化大學準備學會發行（毎月一回發行）

# 三保講演集

一部金二十錢  
一ヶ月金三圓  
(郵税共)

## 第一輯より第七輯まで

●日蓮主義と武士道 小笠原海軍大佐 ●日蓮主義と人物  
陶治 小林文學士 ●四條金吾別枝智教 ●西洋文明の由來  
結崎文學博士 ●日本國の祖先 清水淡山 ●南條氏の信仰  
保阪智吉 ●感化田中哲學 ●日蓮上人の教學及事實 花房  
日秀 ●三位日行考 中村智藏 ●隅州三島開教史談 小笠原  
春翁 ●池上氏の信仰 志村智盛 ●高山樗牛の精神的發達  
結崎博士 ●宗教觀に就て 山崎紫紅 ●歐米現代思潮評論  
桑原智都 ●日蓮聖人の自覺に就て 高島平三郎 ●日蓮上  
人の教學及事實 富谷宣誠等……………

宗門各派の學匠及現代知名の人士が日蓮主義の研究を  
各自得意の壇場より研鑽發表せるものにして宗門の鋪  
素必讀の月刊誌なり各講師の寫眞掲載、菊版每號百頁  
内外二月第七輯發行

## 發行所

靜岡縣清水港三保松原  
(振替口座東京六六七番)

## 師子王文庫

田中智學居士著 (言文一致體振がな付)

# 日蓮聖人の教義

頗美本  
菊版七  
百餘頁

○正價金二圓五十錢(送料内地金十二錢)

## 略目次

○第一篇(總要篇)には「用意」「釋名」「概要」「大統」を  
叙説し○第二篇(教判篇)には教機、時、國、教法流  
布の前後の五綱教判を細説し○第三篇(宗旨篇)に  
は、本尊、題目、戒壇、三大秘法を詳説し○第四篇  
(信行篇)には「信行」「修行」「願業」等を周説し○第五  
篇(史傳篇)には「日蓮聖人の略傳」「宗門沿革」「有名  
なる史蹟」「一々寫眞添」「名家略譜」「七百年間の年  
表」を總説し○第六篇(雜要篇)には「各地異跡案内」  
(寫真人)宗門名著略目錄「研究案内」達意的並に組  
織的)を架説して遺憾なく要領を得せしむ又冠語に  
は科語用語及本文のむづかしさ義理を一々解釋會通  
して、初心者にもよくわかるように設けり  
本書の内容はこの略目次によりて知らるべし

明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可(毎月一回)

(東京三島印刷株式會社印刷)

第 二 百 五 十 號

# 統一



## 神道と佛教

海軍大佐 佐藤鐵太郎

力  
文學士 小林一郎

國家經綸に關する會同問題

記者

日蓮上人の苦衷

大僧正 本多日生



## 大聖日蓮云く

佛滅度後二千二百餘年が間。恐らくは天台智者大師も一切世間多怨難信の經文をば行じ給はず。數々見擯出の明文は但日蓮一人なり。一句一偈皆與授記は我なり。(内廿三種々振舞抄 續遺文一三九八頁)

## 日蓮上人の苦衷

(天晴會三週紀念大會に於て)

大僧正 本 多 日 生

數年前よりして偉人の研究崇拜の聲は一時に高まつて参りました。特に日蓮上人に對する研究鑽仰の熱誠は。年を追ふて非常の速度を以て。各方面に勃興し來つたのである。これは如何なる理由に因るのでありましやうか。それも一部の青年の間とか。習慣の老人の間に止るのであれば。敢て不思議はありませせんが。現代の活動舞臺に働く人々。忠誠無二の陸海軍人、我國思想界の名士。國家の經綸に志す者法曹界の達人。其他文學者思想家の間に。上人を研究し敬慕する人が頗る多くなつて参りましたのは何故であるか。我國の名僧知識としては。傳教あり弘法あり。法然あり親鸞あり。その數は少なからぬのであります。その歸依者は舊來の僧俗に止まり。思想家經世家軍人等の活動的人々によりて。新らしき研究と敬慕とを加へられたるを。聞かないのであります。然るに日蓮上人に對しては。その研究その崇拜が。これ等の新らしき方面より、新らしき意義を以て勃興して参りましたのは。最

も注目すべき點でありまして。是れ決して偶然でないと思ふ。必らず上人の人格と主義との中には。これ等の新らしき人々が新らしき意義に於て。研究し敬慕するに價ひする。主義なり。理想なり。實例なり。若くは活動の靈力なりが。兼備せられて居るからでありましやう。されど上人に對して稱揚歎美すべき點は。多々あること、信じます。私は上人の苦衷に就て。則ち上人が生涯を通じて最も御苦勞遊ばされたるは。那點にあるかを。今新らしき感想によりて聊か述べようと思ふのであります。

曾て故信夫恕軒翁が來訪せられた時。上人の傳を讀んで何處で泣くかと云ふお話があつた。翁は龍口の頭の座も悲しいが。龍口は慷慨死に就くのであるから。上人の如き偉人にありては。憂ふる所ではなかつたであらう。而かし佐渡は四ヶ年に亘りて。寒威と戦ひ飢饉に責めらるゝと云ふので。當時の光景を追懐すると。覺へず涙潛々として下ると云はれましたが。これは誰も御同感のことでありましやう。而かし上人の最も御心勞遊ばされしは。自己の一身上に起る出來事ではなかつたので。上人苦衷の存する處は法難以外にあつたと思ふ。今試みに法難に就ての上人の感想を。御遺文



によりて拜しますれば。何れの場合にも信仰の力に生き。法悦の力を實現せられて居る。

伊豆の謫流に就ては。四恩抄の中に「悪人留難をなさずば菩薩の行を成就し難し。かゝる身となつて候へば二六時中法華經を行するにてこそあれ。末代に生れてこれ程の悦び何事か之に過ぎん」と云ひ。法難を以て功德を積むの喜びなりとせられて居る。又龍口の法難に就ては。種々御振舞鈔の中に「沙を以て金に替ゆるが如し。これ程の喜びを笑へよかし」と云ひ。實在の果報を獲るの喜びを懐かれて居る。又佐渡の法難に就ては。開目抄の中に「流罪は今生の小苦なればなげかはしからず」と云ひ。最蓮房抄の中には「一步も歩まずして本有の寂光土に晝夜に往復す。切初より已來遠國の島に流されし者。日蓮の如く喜び身に餘まる者よもあらじ」と云ひ。現在に理想の光に生き給ふて居る。これ等によりて見るも。法難は上人の最大の御心勞として見ることは出来ぬ。上人苦衷の存する處は。確かに御自身の艱難辛苦の外にありし事が知らるゝ。

上人は「鳥と蟲とはなけども涙をちらず。日蓮は泣かねとも涙ひまなし」と云ひ。又「卍和が暗泣伍子背が悲傷是れなり」と云はれて居るが。憂心冲を躬の爲め目抄の中に上人が大主義の建設を以て。世界最大の戦闘として。その確信を表白せられて居る。斬首我に於て何かあらん。流刑我に於て何かあらん。三類の強敵つものらばつものれ。迫害多難は元より存知の旨也。我道立ち我義破られずば天下恐るべきものなし。但悲む所はこの道の隠れこの義の興らざるにあり。衷心の悲嘆之に過ぎたるはなしとの御心が明白に認めらるゝのであります。

萬難をすて、道心あらん者にしるし留めてみせん西王母が園の桃。輪王出世の優曇華よりもあひがたく沛公と項羽と八年漢土をあらそひし。頼朝と宗盛が七年秋津島にたゝかひし。修羅と帝釋と。金翅鳥と龍王と阿耨池に争へるも。此にはすぐべからずと知るべし。

(3) 上人が主義の建設を如何に重大視せられしかは。この一文によりて明白なりと信する。諸君法華經は日蓮上人を通して見なければ。その真意義を看取することとは難いのである。上人の法華經觀は開顯主義の大成であります。開顯主義とは小理義を啓發善導して。一個の大主義に綜合歸一せしむるのである。上人より見れば人道と佛道とを二分するは。未だ開顯の妙旨に達

にあらすと云ふ點は。果して何れにありしか上人の泣き給ふは主義の爲めである。則ち道の爲めに外ならぬ。道と云へば學敎家の常套語なるも。上人の泣かれし道は。眞の道である。今尙凜然として我國の前途を照して居る道である。

光日房抄に

よも此御房は弘法大師にはまさらじ。よも慈覺大師には超へじなど。人くらべし候ぞ。かく申す人をばものしらぬ者とおぼすべし。

と仰せられてあります。眞に痛快なる警句である。上人の特長に就ては人格の上に於て。諸種の美點があつて。或は勇氣熱誠を稱し。或は抱負識量を歎じ。其の他氣節と云ひ健闘と云ひ。慈愛と云ひ謙讓と云ふが如き。幾多の徳風が備はつて居るのであります。これ等の人格の美點を數へて。他の偉人の高德と比較して。之を上下する如きは。上人の眼中に留め給はざりし所である。上人自から先人に卓越せりとし。後人にも稀なるべしと自信せられし點は。正しく主義の上である。則ち上人の奉じ給へる道の上に。自から光前照後の權威を有し給ふに居たのである。従つて上人苦衷の存せし處は。復この眞の道の發揮に外ならぬ。開せずとせらるゝので。現實と理想の配合せられざるも。佛敎中の諸多の義門の歸一せられざるも。皆是れ開顯の妙致を逸するの失となすのである。

開顯主義の妙致は天晴地明の達觀である。天晴は法華經の大理想に達するを云ひ。地明は現實の世の一切に達するを云ふのである。政治も道徳も生活もその他凡べての人事は。悉く法華經の大理想によりて。啓發せられ統一せらるべきを云ふのである。

諸君二十世紀に横はれる最大の問題は何でありますか。宗教と哲學との融合でありませしやう。智識と信仰との一致でありませしやう。然るにこの問題は東西幾多の思想家哲學者宗教家の中に於て。未だ適當の斷案が發見せられずして。望洋の嘆聲を聞くのであります。然るに何ぞ知らん七百年前日蓮上人によりて。明晰なる斷定が下されあらんとは。上人は絶對の眞理と圓滿の本佛との合一を。分明に開示せられて居る。哲學の絶對原理も。眞言家の事理俱密も天台宗の一念三千も總べての眞理上の開明は。上人の絶對の道に於て統一せられ。而かもこの絶對の眞理そのものを一轉進して人格の本佛を光顯せられたのである。上人は智的研究の極處に進んで。眞理の基礎の上に。本佛の實在を論



謂せられて居る。天台傳教の一念三千の真理の上に。本尊を光顯せられて居る。彼のカントが理性批判の上にては。不可知に終はり。實踐批判の上に於て。宗教道徳を建設したる如き遣り方は。我國に於ても法然や親鸞が。天台の一念三千觀を去つて。彌陀念佛の信仰に逃れしと同轍であつて。到底二十世紀の希望に副ふ所のものではない。日蓮上人は撰を異にし。智的研鑽を極度まで進めて。更に一轉進して。真理の基礎の上に本佛の實在を論證し。之を本尊とし給ふて居る。

一念三千の法門をふりすゝぎたてたる大曼陀羅也。當世の習ひそこないの學者等。夢にも知らざる法門也。

と喝破し給ふて居る。眞に愉快絶ではありませぬか。此此大知見は尋常の研鑽によりて得らるべきでない。清澄山頭に血を吐いて。日本第一の智者となし給へと祈り。爾來二十餘年の精練深究の苦心に報ひられたので。この間に於ける上人の心事は如何なりしぞ。右も高德左も碩學。智に於ては龍樹天親天台傳教。將た弘法慈覺智證等あり。信に於ては道綽善導惠心法然等あり。各々法幢を轟へし。智は日月に比し徳は四海に布く。世人の尊崇敬慕を集めたるの人となり。而して他面

宗教の信仰と忠誠の觀念とを。融合するに最も苦心遊されたのである。

上人が開目抄に於て。宇宙の大より論じ來りて。宗教信仰の對象を統一神教的の理想に定め。宇宙絶對の上に統一の本佛を奉じ。而かも天月水月の本迹觀を以て。國の神としての天照八幡も。同じく絶對統一の佛と。その根元を一にする事を明かし。而して自から誓願を表白するには。『我れ日本の柱とならん』と唱へられし如き。正しく宗教の信仰を根本的に御國體と融合し。更に最後の決心を日本の柱と云へる國家觀念の上に拵へられたのである。佛敎各宗は多神散漫の失に落ちて。宗教の極處に達せず。基督敎は唯一神敎の主義によりて國の守り神を否定す。二者何れも信仰と忠誠との根本的一致を見るに於て。缺くる所がある。上人の主義は。宇宙絶對の本佛と國家守護の神明とが。根本に於て一に歸し。信仰と忠誠とか活動の上に一致する事となつて居る。この大主義の建設に於て。上人は人知れず苦心遊された事と信する。而してこの信仰と忠誠とを一致せしめ。宗教の根本敎義と國體の淵源とを融合するの主義は。今も尙我國の現代及將來を照らし居る所の光輝ある大主張であると思ふ。

には經論釋書大藏に満ちて容易に取捨を決すべくもあらず。この中に立ちて。快刀亂麻を斷つが如く明快なる斷定を下し。更に先人未發の大主義を發表し給ふには。上人の苦衷の如何なりしかは。我等の想像も及ばざる所であつたと思ふ。

更に上人の苦衷を察し上るに。宗教の信仰と忠誠の誠意とを融合するの一事に存せしかと思ふ。宗教の信仰は熱烈の性質を帯ぶるものであつて。自己を捨つるを顧みざるに至る。人間の情操の最も美しき點である。又忠愛の誠意に於ても。君の爲め國の爲め一身を捧げて毫も意とせざるに至る。これ亦人間情操の最も尊とむべき點である。この二種の光輝ある人間の熱誠が。若しも相反して發現する場合には甚だ悲むべき結果を齎らし來るのである。而して之を明りに一方に偏して他方を排する如きは。思慮の足らざるものと言はねばならぬ。こゝに於て二者の融合は國家の爲めにも人類の爲にも。至大至重の問題たる事が知らるゝ。然るに多くの宗教家は宗教の信仰を得れば。忠愛の大事を以て便宜的に説明せんとし。又愛國の志士は忠愛の觀念あらば。宗教の信仰の如きは如何になるとも。問はざるの人が多い。上人苦衷の存せし處は。正しくこの

更に上人は道と國との關係を闡明せらるゝ點に於て苦衷の存せし事が見らるゝのである。國にして道なくんば無道の國家である。道にして國を忘るゝ如きは。不完全の道である。國家には内國民の歸趣を知らしめ。外世界の文明を指導すべき。大主義大理想なくてはならぬ。この大主義大理想に依つて立つ所の道を尊重することを忘れて。明りに國家主義を唱ふるは一大謬見である。さればとて宗教の道に偏して絶對と云ひ博愛と云ひ。明りに平等に流れて。國家存立の重大事なるを知らざる如きも。亦極めて憐むべき迷想である。上人の着眼はこゝに存せり。國にして道を尊重せざるは謗法の國家なり。道にして國を忘るゝは破國の邪法なり。宜しく道と國とを結合して。立正安國の大義を實現せねばならぬ。上人が「法を知り國を思ふ」と絶叫せられし苦衷は。實に千古萬古に輝いて居るのである。上人が「彼の國によりし法なればとて。此の國にもよかるべし」と思ふべからず」と喝破し。『若し此の國を毀壞せば。復佛法の破滅も疑なき者也』と宣言せられしは。道をして國に合致せしむるの苦衷に出でたのである。他面に「法は體なり國は影なり體曲れば影斜なり」と絶叫し。鬼神亂るゝが故に人心亂る。人心



亂るゝが故に國家亂る」と誠告せられしは。國をして道を尊重せしむるの苦衷より出たのである。上人は我國體の萬邦無比なるを敬讃するは勿論。先人未發の意義に於て我國の天職を自覺せられ。我國は世界の精神界に光明を與ふる所の。眞の道を興立し擁護する國家ありとせられて居る。決して政治に阿ねり。國家に迎合して。布教の方便に供すると云ふ様な淺膚の御意見ではない。皮相の見を以て上人を御用坊主と云ひ官僧と云ふが如きは。彼等自身が眞道と國家との根本的契合點を會得せざるの病見である。井蛙の屈見。擔板漢である。

上人は一面より見れば。世界最大の眞道たる絶對無上の妙法華經を以て。我國家に捧げられたる。大忠無二の國士であると同時に。他面より見れば。我無上莊嚴なる帝國をして眞道を敬重せしむる。純潔無比の聖者である。王法より見れば超凡の國士。佛法より見れば傑出の聖者である。斯くて主義の上よりも宗教の上よりも。共に道と國とを融合一致せしむる點に苦衷の存せしを見らるゝのである。上人が「王法佛法に冥し佛法王法に合して三祕密の正法を建立す」と云ひ、「勅宣并に御教書を申し下して。靈山淨土に似たらん最勝

教の朝より。弘安入寂の夕に至るまで。立正安國の大志願を以て。貫徹かれし點にあると思ふ。

これ等の三點は。上人が國士として將た聖者として「日蓮は泣かぬとも涙ひまなし」と叫び、「平和が暗泣伍子胥が悲傷是れ也」と悲しみ給ひし苦衷と。拜察し上るのであります。

この天晴會の三周年紀念大會に於て。上人の苦衷に就て一言致しますものも。上人の苦衷は過去の夢と化し去つては居るまい。今も尙昭々乎として吾人の履むべき道を照らし。凜然として我帝國の前途を導き給ふ事と信じまして。こゝに新らしき感想を披瀝致した次第であります。願くは上人を敬慕する諸君と共に。上人苦衷の存する處を服膺して。この大主義大理想の實現に竭したる存じます。

(完)

の地を選んで。本門の戒壇を建立すべし。但し時を俟つべきのみ」と仰せられしは。眞に上人が夙夜に道を思ひ國を思ひ給ふ。丹心赤誠の溢るゝ所であると。拜察し上るのである。

以上述ぶる所の外にも。主義主張の上に上人の苦衷を見るべき點は少なからずと思はれますが。今はこゝに止めまして。以上の所見を一括致しますれば上人の苦衷に三大要點あり。一は宗教と哲學。理性と信仰との融合解決であつて。眞理の極處に本佛を光顯し。信智共に満たさるゝの主旨を闡明し。觀心本尊を顯示し給ふた點である。二は宗教の信仰と國體の淵源との融合解決であつて。宇宙對絶の本佛と國家守護の神明との同根一體なるを明し。宗教信仰の中に國家觀念を溶融結合せしめ。統一神教的の大主張を發揮し。開目抄等の名著を留め玉ひし點である。三は道と國との融合解決であつて。國家の興立を念とせざるの道。眞道の興立發揮を念とせざるの國は。共に誘國邪說なりと斷定し。國家の絶對の靈威と宗教の絶對の神聖とを。巧妙に一致結合せしめ。水乳相冥するがやうに。函蓋相合するがやうに。王法佛法を歸一せられ。立正安國を畢生の主張とし。知法思國を誓願の生命とし。建長開

## 神道と佛教

二月十六日、日宗大學主催聖誕降誕會における講演に於て、大佐の堂々卓越の識見論議は大に世道人心を啓蒙するの活力あるを信じ、特に大佐に請ふて寄稿を仰ぎ、茲に掲載するに至りぬ。(三上生紀)

海軍大佐 佐藤 鐵太郎

此項は思想界が甚く混亂して居ると云ふことでありますから、私如き門外漢が「神道と佛教」と云ふ様な六かしい問題を提へて、是を論ずるなどは有害無益かも知れませんが、私は物事の研究に就て一ツの所信を持つて居るのであります、多くの方々は何事を研究するにも、それに近よつて精細に吟味せなければならぬと云ふのが通例であります、之は實際その通りであらなければなりませんので、殊に學問的に研究致します際には、是非共深く這入り込んで研究せなければなりませんのであります、私は之と反對に可成遠く離れると云ふ方法で研究するのであります、何も好んで遠く離れると云ふ譯ではありませんが、餘り近づいて



仕舞ますると一切の事は詳細に解りまするが、大體の形が分りませんでど何が何やら分らなくなつて仕舞ふのであります、其處の具合が丁度富士山に昇つて見ると、富士山の形が分らなくなると同様に、畢竟局部的思想に囚はれて全體が見へなくなるのであります、又同じ富士山を見ましても、中途に家か森でもありますると之に妨げられて見へませぬが、此場合に於て左程眼の高さが高くありません、後に退いて見ますると能く見へるのでありますから、此意味に於ても大體の觀察は近くよりも寧ろ遠い方がよい様に考へられます、之は必ずしもさうばかりは參りますまいが、先づ大體さう云ふ心持で「神道と佛教」とに就て門外觀を述べて見ようかと存するのであります。

私の住所の近邊に道灌山と云ふのがありますが、其道灌山に争ひの杉と云ふ名木があります、今は鐵道敷設の爲に移されてとう／＼枯れて仕舞ひましたが、この杉の木に關し誠に善き教訓があります、昔し一人の士が道灌山を通りまして誠に振りのよい松の樹を見て

例などは確かに私が前に申上ました見解と反對でありまするので、先づ大體遠方より其形を見てそれから近づいて其性質を研究せなければなりませんと思ひますが、此二人の士が腹を切て申譯をしたと云ふ様なことは、畢竟時代の弊風たる一種の思想に囚はれた結果でありますので、さう云ふ事は餘程注意せなければならぬと思ひます、或る亞米利加の成金か或國の王様の冠を見て幾らで賣つて呉れるかと云つたさうであります、黄千萬能の思想に捉はれて仕舞へば斯う云ふ風になり、物質萬能の思想に囚はれて仕舞へば、御神體や御釋迦様の御像に硝酸をかけて見る様なことにならざらうと思ひます。

(9) 世間の思想が斯う云ふ風になりましては誠に困り入つたことではあります、此頃の思想界は果して健全でありますか、或は又世人の言ふが如く混亂時代でありませうか、私は果してどちらでありますか斷言は出来ませんが、兎に角、融合せぬ眼界の狭い局部々々の思想が雜然として存在するが如く見ゆる

ア、あの松は如何にも立派なものだと云ふて賞めましたら、イヤあれはア！見へても杉であると云ふて今一人がそれを笑ひました處が、その士はいや決してさうでない、あれは疑もなく松である杉ではない、あんな枝振りの杉は決してあるものではないと云ふて重ねて争ふたので、いや杉だいや松だと云ふ大争論が始まりて結局實観することになつたので、トウ／＼松ではない矢張杉であると云ふことが分りましたので、一人の士は面目ないと云ふて腹を切つたと云ふことであります、其事を聞き傳へた他の士がそれは如何にも氣の毒である、自分が始めより承知して居りながらそれを争ふたのは士に在り敷くことである、如何にも申譯がないと云ふて同様に腹を切つたさうであります、此の二人の士は如何にも男らしくはありますが、二人が二人とも自分等の身は自分等自身のものではない、二人とも主人から御預りの身であると云ふことを忘れて、こんな小事の爲に大争論を起し、自分勝手に自分の身を處分するなどは大體大間違の話であります、この

のであります、自然主義とか社會主義とか、國家主義とか田園生活主義、科學萬能主義、黄金萬能主義と云ふが如き色々の主義がありまして、今日はまだ統一も融合も行はれずに生々しい有様で存在致して居りますので、此點は是非共同とせなければならぬと思ふのであります、是等を融合し是等を統一するのは疑もなく神ナガラゝの靈教的淨化作用に因るとは信じて居るが、之を估けて其意義を全し目下の混沌たる思想に威力ある合理的調戒を與ふべきは、哲學上現實上二ツながら圓滿で理事共に具足する日蓮上人の教であると思ひますので、今茲に「神道と日蓮上人の佛教」との融合點を研究しようと思ふのであります。

私は此間「天晴會」の第三年記念會の節には「神道と日蓮上人に依つて開顯せられたる佛教」と云ふ事に就て少しく意見を述べたのであります、時間が足りませんので何となく遺憾に感じましたから、今日再び類似の問題を掲げまして申上げ様と存じます。

今日の題は「神道と佛教」と云ふので、日蓮上人に



依り開顯せられたる」と云ふ説明を除きましたのであり  
 りまする、何せなれば佛敎の眞髓は法華經で、法華經  
 の眞髓は日蓮上人を待て然る後開顯せられたのであり  
 ますから、此度は能と説明の文字を除いたのでありま  
 す、中庸に仲尼祖述堯舜とあります通り、述べて作  
 らず信じて古を好むと云ふのが一人難有ること、私は信  
 ずるので、日蓮上人の御趣旨は正しく开處にあること  
 は御遺文を見ても明瞭なる事であります、そこで彌々  
 本論に入りまするが、私が今こゝに神道と申まするの  
 は、神ナガラ道の道則ち神様の御心を其儘の道を云ひま  
 するるので、則ち我等日本民族にとりては皇祖以來遵奉  
 し來りたる古典其儘の道であります、譬へば基督教の  
 舊約の如き意味合に於て、古事記舊事記日本記乃至ま  
 た古語拾遺及祝詞の如き古典に於て神代の卷より説明  
 されて居るのが神道であります。

人によりては神道は宗教ではない經典を持たない  
 教理もないから宗教としては缺けて居ると云ふ議論も  
 あります、それは如何にもそうかも知れませぬ、少な

くとも哲學的の意味合がないかも知れませぬ、乍併若  
 し紙に書いた經典や教理がないから宗教の資格がない  
 と云ふならば、第一結集以前の佛敎や新約全書以前の  
 基督教は宗教ではないと云ふことになるのでありませ  
 ぬまいか。

成程古代日本民族の宗教思想は如何にも幼稚であつ  
 たに相違ありませぬが、他の民族と違ひ難かに王様の  
 種であつたのでありませぬ、まだ頑是な赤坊であつ  
 ても確かに凡人の種ではなかつたのでありませぬ、そ  
 こで天地の神祇祖先の神靈が國土子孫を御護り下さると  
 云ふ觀念が土臺で、至極の信仰を起し何事も神意を伺  
 ふのでありませぬが、天地の神祇は祖先の神靈と其意  
 義に於て全然融合するのみならず、之に對する觀念は  
 他の古代民族の雜然たる者と其の性質を異にし、無始  
 無終の意義を完備する大靈徳が神備敬神備美の尊とな  
 り、常住不滅の意義と立派なる人格とを完備しつゝ、我  
 國土民族を御守り下さるので、其意味合に於て吾一人  
 のみ能く救護を爲すと仰せられたる如來と同一の意義

を有するので、我國體は三身具足の本佛と同様の意義  
 ある大靈徳の作用に依て維持せらるゝのでありませぬ  
 で、絶對の意義は法身、御稜威は報身、御歴代の御皇  
 統は則ち應身でありませぬ、要するに皇祖皇宗の御遺訓  
 を稱して神ながらの道と謂ひまするので、神のまゝに  
 隨ふ道とも自有神道とも本有神道とも稱すべき皇祖皇  
 宗の御遺訓でありませぬ。

此御遺訓の本源は如何なる事かと申しませすれば、是  
 は本より自有でも本有でもありませぬので、何つから  
 始まつたと云ふことはありませぬが、我々日本民族に  
 對し始めて開顯せられたのは、我々葦原の中國の  
 青人草を御憐恤あらせられ、世界の中樞として我日本  
 の國土を御選定遊ばさるゝ同時に、諸の患難能く救  
 はんとの御本願を御立てになり、この御本願の爲皇孫  
 の尊を御下しになりませぬか始めてありませぬので  
 其時代の事を日本書紀には

皇孫天津彦火瓊杵尊ヲ立テ、葦原の中國ノ主ト  
 セントヲホスシカモ、ソノ國サワニ螢火ノ光ル神、蠅

聲ナス邪キ神アリ、マタ草木咸ク能言語フコトアリ  
 とありませぬし、他の古典にも之と同様の事が書てあ  
 りませぬので、其様子は國中大擾亂の有様で、諸の苦  
 み諸の惡難が國民を苦しむること甚しいので、皇  
 祖大御神は之をわはれと思召され、先に之を平けて萬  
 世一系で絶對の意義を具足する御皇統を立てられ、太  
 平和を無窮に傳へらるべき御思召であらせられたので  
 其の様子は法華經の

三界無安 猶如火宅 衆苦充滿 甚可怖畏  
 それからまた

其中衆生 悉是吾子 而今此處 多諸患難  
 唯我一人 能爲救護

の處に當るのであると私は信じませぬ。  
 中世以後の學者達が儒佛の二道に對して神道と申し  
 まするのは、通例兩部神道とか申すので神ナガラ道の  
 ではない様であります、此兩部神道と申しますのは、  
 本地垂迹説より産み出しませぬので、即神佛一體説で  
 あります、大國主尊が大國天になつたり、市杵島姫尊



が辨天になつたり、畏れ多くも天照大御神が大日如來になられたり致したのは皆此兩部神道であります、又歌讀み連中が國粹保存の心持か、他の宗教に對する敵愾心か、兎に角一種の反抗心より唱出しました神道即ち今の神道も神ながらの道ではありませずして、此局限せられたる小日本を理想とする消極的思想で、つまりは對外排斥主義でありますので、神ナガラ道の包容主義統一主義に反する如く見ゆる如くあります、併し此主義が假令偏狹に失ずるとは云へ確かに血脈を神ナガラ道の道に引て居るので、所謂「齋一變至於魯魯一變至於道」と云ふ有様であるので、私は如何なる事に就ても偏狹なる精神は確かに迎合の精神よりも正しいだらうと思ひます、此の神ナガラ道の經典と致しましては、前にも申しました通り「古事記」「舊事記」「日本書紀」「古語拾遺」などは立派なもので、此他古來傳つて居ります祝詞警へば新年祭の祝詞の如きものは立派なる經典であると私は信じます、是等の經典の内には

本有不滅の御國體の意義  
包容同化及統一の意義  
誠意公事に勤勞して自身の利害を忘るゝ、高尚なる觀念  
寛洪勇武にして思慮深き國民性  
純潔を尊む國民性  
より

君臣の道  
親子の道  
夫婦の道

等、一として備へて居らぬ者はなく、何處までも心を捧げ身を獻する意義を以て一貫する國民性の精華は、躍如として古典の上に照はれて居るのであります、警へば君の爲には身を思はず、國の爲め親の爲には身を遣れ、唯だ「一心に「御爲め」の三字を念とし、己れの愛する人に對しても全然自分を犠牲にし、唯だ唯だ愛する人の幸福を憶ふなどは即これでありませず、之を一々事實に就て申上げますると大分長くなりませす

ので唯だ其大要のみ申上げますが、本有不滅の御國體に就ては前にも申上げました通り。

豐葦原中國是吾兒可王之地也

と仰せられたのは則ち是れでありますので、凡そ如何なる國如何なる民族と雖、之が主義者なければどうしても平和を維持することが出来ません、この點より考へて見れば、革命の意義ある國家は理想的の國家とすることが出来ませぬ。どうしても人力にて出来上つたものではいけません、人力にては如何ともすべからざる靈力を有する關係でなければいけませんので、開闢以來君臣の分定まり臣を以て君となすは未だ之れあらずとの大獅子吼を有する國家でなければ本當の國家とは云ふことが出来ぬと信じますが、この簡單なる神勅が色々の幽玄なる意味合を説明致しまするので、遂に我國の如き世界無比なる御國體となつたのでありませず、又包容統一の意義に就ては祈念祭の祝詞に

皇大御神ノ見齋ルカニマス四方國ハ天ノ壁立ツ極ミ國ノ退キ立ツ限リ青雲ノ靄リ極ミ白金ノ墜リ坐

向伏ス限リ青海原ハ掉控干サス舟ノ楫ノ至リ留ル極ミ大海原ニ舟滿チ續ケテ陸ヨリ往ク道ハ荷ノ緒傳ヒ望メ磐根木根履ミサツミ馬ノ爪ノ至リ留ル限リ長途間ナク立續ケテ狭キ國ハ廣ク峻キ國ハ平ケク遠キ國ハ八十綱打懸ケテ引キ寄スルコトノ如ク皇大御神ノヨサシ奉リ玉ヘハ荷前ハ皇大御神ノ太前ニ横山ノ如ク打チ積ミ置キテ殘リヲハ平ケク聞シメサム

とありませすなどは則ち包容統一の御趣意に相違ありませぬ、例の物質論者に此祝詞を讀ませましたならば、征服主義とか何とか申すでありませしうが其れは決して然うではありませずして、雄大な包容統一の意義を含むのは我國の歴史が之を證據立てるので、我日本國は建國の昔より既に此天職を完ふせんが爲に出生致しまして今や其道中に在るのであります、また獻身的の御奉公の事に就きましては、

己カムキ〜アラシメヌ邪キ心穢キ心宮進メニ進メ宮勤メニ勤メシメテ谷過アランヲハ云々  
と云ふ祝詞などは誠に良き教訓で、獨り之れのみなら



す神代の巻を通じ此點に關する勸善懲惡の意義を充分に示して居るので、畢竟誠意を以て宮進めに進め宮勤めに勤めしめて、御奉公第一に毫厘も私の心なく公事は勤勞すべしとの御主意に外ならぬので、日蓮上人が「宮仕を法華經と思召せ」と仰せられしと同一の意義であるのであります。

また智仁勇の三徳は三種の神器に關する御教で明瞭であり、萬機公論に決する底の大御心は既に神代の歴史に明かでありするが、天照大御神の素尊に對せられたる御様子、思兼の命の御事蹟、天の安河原の八百萬の神々の集會、武甕槌經津主の勇武、大國主御親子の大義名分封土奉還の偉大なる事業は、皆悉く之等の意義を證據立てるのであります。

清潔を尊む性格罪障消滅の意義は禊祓の古傳によつて明瞭でありするが、伊邪那岐尊の稗原の禊祓を始め大祓の祝詞にもある如く

天下四方國ニ罪ト云フ罪ハアラズト科戸ノ風ノ天ノ八重雲ヲ吹き放ツコトノ如ク朝ノ御霧夕ノ御霧

ものを尊敬する精神は他の國民では到底見られない處で、何となく不輕菩薩の如き面影を存して居るが如く見ゆるのであります、三十七八年戰役に於ける露國の捕虜に對する寛恕なる所置の如きは、明かに我國民性を自然に發揮したものと私は信じます。

此他夫婦の道を正されたる伊邪那岐伊邪那美の尊の御事項を始め、情緒の切なる須世理姫の御傳記などの立派なる教訓が古代史に充滿して居りますので、一々飾りなく人情の至微を貫きながら嚴然たる大典を其純朴なる傳説中に含めて置かれたのであります、此他婚禮のこ女性のたしなみの事等に至りましても、古典にて充分に立派なる訓戒をこめて居らるゝので、殆んど凡ての方面に行き渡つて居るのであります、我日本には如斯立派なる神髓の道があつたのであります、儒と佛とが参りましたので從來の簡單にして純潔なる教よりも、何となく高尚なる理屈を云ふことに耳を傾けることになりましたので、人情も段々と錯雜になつて参つたのであります、之等は自然的趨勢の然らしむ

ヲ朝風夕風ノ吹き拂フ如クと云ふ様な優美なる寛容なる様子で、人々の罪はミツギを以て拂ひ清むるので、既に拂ひ清めたる上は其罪人を見ると極めて寛容であつたのであります、是等の關係は誠に以て法華經主義であつたので、唯一絶対の本佛を意識する如く、無上絶対の神靈に對して起るべき自然の思想であります、こう申上げると何となく解し悪き様に自分ながら考へます、法華經主義は佛魔兩立の主義ではありませぬ、悪人が悪事をするも佛の作用である、譬へば芝居の敵役の如くこの世間の舞臺に敵役として現はれたのである、其罪は素より惡むべきであるが人としては決して惡むべき者ではない、人に嫌はるゝ敵役となつた氣の毒な人である、既に其罪を離れミツギを受けたる以上は決して惡むべきものではない、大道無道の提婆達多でも一念發起すれば立派に成佛するものである、既に王師に敵對する如き所業あるとも決して之を罵る如きことなく、また外國人を大戎だとか夷狄だとか云ふ様なことはなく、凡ての

る所で簡略より繁雜に入り、更らに轉化して簡略となるのが當然の順序でありますので、我國民の思想界も此順序に従て變遷するものと認めなければなりません、ぬが、殊に我國には包容同化の意義がありますのでこの作用も活潑なのであります。

其處で先づ第一に儒教が這入りまして絶対の意義に理非曲直の論を挿む様な具合になり、長功の分を正さんが爲天子の御位を空虚にするに三年に及びたるが如き有様となり、況して世の中は段々と理想とか理屈とか云ふもので司配する様になり、萬事言アゲせぬ國風も自から衰へて参つたのであります、佛教が傳はり儒佛相佑けて神道を亡さんと致しましたが、之は丁度基督教と西洋の哲學とが相合體して從來の儒佛二教を拂ひ除かんと企てたならば今日の場合には何うであらうかと思はれますが、恰も之と同様な而かも劇烈な争闘が起りましたので、遂には神ナガラテの道は衰へて仕舞、儒佛二教殊に佛教が國民の思想界を支配するところになつたのであります、之より後、佛教の勢力衰へ



して増長致しましたが、如何せん佛教の眞髓が未だ明かになりませんので、可忍情弊が其勢力の増加に伴ふて起り、後には政教紊亂の有様になつたのであります、政教分立の意義は大國主尊の宣言、即現の事は之を皇孫に奉還しヨミの事は自分で主裁致しますと云ふ宣言に依つて明白になつたので、この一點のみでも神道の偉大たること明かでありますが、何に致せ法としては三論法相より華嚴律に至るまで、時代としては鉄明の渡佛より奈良朝の間、約三百年間は主として現世安穩、而かも主として個人の安穩と福利の爲めの祈禱で、寺院の建立なども表向きは國家の祈禱もあつたに相違ありませんが、其内容は主として建立者即施主の私の祈禱に過ぎぬので、佛教の眞意義などは糊に上げ祈禱三昧の時を過し、病氣の加持家運の祈禱の如きことを以て佛教の本義と心得る様になり、今日で云へば所謂救濟事業とか公共事業とか云ふ如き意味合をも加へ人心收攬策を講ずることに腐心したので、終には政治と混同して仕舞支防道鏡の如き妖僧を出して天下の方

大政を紊亂するに至つたのであるが、この際に於ける佛教徒は全然其立脚地を忘れて非望を企て、一天萬乘の君を出家受戒せしめ自から三寶の奴と稱せらるゝ如きことになつたのであります、此間に弘通されし三論成實法相華嚴等の宗派は現世執着の卵となりししたので、我國本來の美風は殆ど地を掃ひ人倫の亂れ殊に甚しくなつたのであります、乍併政教紊亂の事實は佛教に大打撃を與へ、妖僧の非望は宇佐八幡の大喝に逢ふて縮み上り、政教分立の舊制に回復致しましたが、傳教大師と弘法大師とが殆んど時を同ふして御出世になりましたので、一時衰頹の兆を顯はしました佛教は再び盛大となり殆んど驚くべき勢力となつたのであります、後繼者の爲でもありましうが、要するに深遠なる理想の研鑽と加持祈禱とを以て能事たりとするが如き有様となつて仕舞、佛法の本旨は次第次第に失はれまして愚にも付かぬ宗論や、如何はしき祈禱の効果を争ふて優劣を決するが如き有様となつたと云ふ事であり、是等の關係は茲にお出の皆様方

の方が能く御存知あるべき筈でありすが佛法もこうなつては仕方がありません、唯だ現世執着の念ばかり盛んになり、甚きに至りましては御祈禱を悪用して善人を咒咀調伏すると云ふことになつたのであります、加之是等の坊主は共に半僧半俗と云ふよりも寧ろ半坊主半ゴロツキと云ふ有様で、肉を喰ひ酒を飲むはまたしも甲冑を着鎗長刀を携へイボ／＼の座の棒を振り廻はして亂暴を働き、叡山若くは南都の悪僧と云ふて威張るに至りましては殆んど極端であります、譬へて見ますれば今の上人様方が、袈裟衣の下に金モールの軍服を着軍帽を戴きサーベルを提し鐵砲をかたげて馬に乗り廻はすと云ふ體裁であつたとすれば如何でありましようか、モウ／＼こう云ふ風になつては佛法も何もあつたものではありますまいと思ひます。

如斯有様でありますので、世道人心は彌々壞敗致しますし佛教は日に益々墮落致しますので、時代の要求上どう致しても一偉人の出現を要求することになりましたので、法然上人が世に出られて現世執着の

念を取り去り、一時の方便(私は之を一時の方便と云ひます)に依り西方阿彌陀佛に歸命するの精神を起さしめたので、誠に能く隨機施法應病施藥の義を顯はしたのであります、此現實世界を穢土として仕舞未來世に西方極樂淨土に往生せんとするのでありますので、畏竟此國土を重するの觀念を去り遂には怨し難き謬見に陥るとになつたのであります、今一層進で云ふて見れば、此大切な日本國此靈異なる日本國も取るに足らぬ汚穢い國であると判斷致しまして、斯の如き汚穢い國は厭ふべき者である速に之を捨て西方にある阿彌陀の御膝元に往生せよと云ふのでありますので、忠君愛國の意義とは相容れざる思想となつて參るのには是非もないのであります、併しこゝに注意すべきは現世貪着の念最も深き今日であります、之を救濟するには果して如何なる法を用ゆべきでありますしうか、今日の法然上人はモット／＼立派なものを以てこの世を救はなければならぬと思ひますが、果してそんな方が御出でになりましようか。



そこで再び天台眞言の時代に歸りますが、元來この二つの宗旨は必竟するに難解難行の教に相違ありませぬので、其弊は動もすれば高遠なる理論に走り或は術怪なる呪詛祈禱に流れ、反て純朴清潔なる信念を害し唯だ自身の幸福と榮華にのみ執着致しまして、之が爲鄙猥なる觀念を起すに至らしめたので、六ヶ敷い聖道門を捨て、解り易い淨土門を開きまして五欲三毒を救ひ、穢れたる娑婆世界を捨て、安養國に往生すべき福音を垂て後生に救はるべき道を示しましたので殆んど闇夜に燈を見るの思を起させましたのであります、此事は當時の世道人心に大感化を興へ、現在に執着して此醜き體を貪惜するの氣風を一變し、死を見ること歸するが如う土風を起させたのであります、時勢の進むに従ひ一般に厭世主義の世界を造り消極的思想のみ蔓ることになりましたのであります、此思想は疑もなく我御國體に悖りますのみならず、我日本國を穢土とする觀念は確かに神ナガラ道の道に反しまするので妻子も珍寶も王位も夢幻の如く何等の貴むべきもの

意せぬので畢竟穢土を厭離する觀念となり自然の結果として御國體を輕するものあるが如きことになつたのであらうと私は考へます、さうながら當時以來の人心は皆悉く念佛宗に歸依し、津々浦々に至るまで念佛の聲を聞かぬ所はないと云ふ有様であつたと見へます、世間の道徳は彌々亂れ親は兒を殺し兒は親に背き臣は君を侮り、下尅上尊上向下の極を盡すことになりましたので、他力一遍の觀念計りては足下さへも定かならず、如何にするも安心すること能はざる如く感せらるゝので、一種の煩悶は自から人心をかきむしりましたのであります、御國體を忘れ君を忘れ親をも兄をも忘れ且つ互に忘れられたる身であります以上は、如何にするも一身の解脱を求むるより外はありませぬので、遂に枯華微笑直指人心心性成佛と云ふ様な何となく心相のよい教義を好む様になつた譯であります、何に致せ其目的とする所は一身の解脱に外ならぬので、殆んど大義名分の何物たるをも打忘れ世道人心は益々墮落する計りとなつたのであります。

ではない、如何に愛惜するも彼の世に持て參るとは出來ないと云ふて丁度旅行でもする様な思想を起し、此世を假の宿と心得道中の旅店にても宿つた氣になるので、畢竟は畏れ多くも一天萬乗の君をも無主人の如き心持に見ると云ふので、之が爲驚くべき悪影響を受け我日本帝國の國體を尊重するの念を薄うしましたので、則歴史上傳ふる如き失體を生じたのであります、穢土則ち汚れたる娑婆世界を捨て、彼の世に往生せしめんとする理想は誠に尤もな思想であります、我國とも法然親鸞上人時代に於ては汚穢極まる娑婆世界であつたのであります、獨りあの時勢のみならず現代とても全く綺麗な世界ではありませぬので、こう云ふ考を起すのも無理ではありませぬが、我日本國は「一向純圓の機なり」と日蓮上人の仰せられたる如き特別の國柄でありますので、同時代の有様は譬へば雲に覆はれたる日輪の如く、日輪の本體は依然として明皎々たるもので、娑婆即寂光土とは日本の事で、他の國は到底及ぶべからざる尊と御國柄であると云ふ點に注

我國の佛教は、三論宗の昔より律天台眞言淨土及禪の弘通時代に至るまで自から盛衰興廢榮枯得喪の有様を示したのであります、表向に於てはイザ知らず其内容に於ては殆んど何等の國體擁護に力むる所がなかつたので、國家と宗教との關係は厭ふべき醜關係の外殆んど没交渉の有様で反て歴々と御國體に反するところがあつたのであります、若しも佛教夫れ自身が國家を目的とせずして人類を目的とするものであつたならば是非もないのであります、我日本の國家は他の國家とは存立の意味合に於て雲泥の差がありますので、一方より觀察して見ますれば、佛教の眞體たる法華經其ものは我國體の大意義たる無始無終常住不滅の意義と包容統一の意義とを説明する爲に存在するもので、他の一面より觀察して見ますれば、我御國體は法華經を色讀しつゝあるとも思はるゝので、此意義に於て神ナガラ道の道と全然一致するが如く見ゆるのであります、然るに從來我國に流通致しました諸宗旨は此意味を含みませぬので、動もすれば御國體と全然反對の結



果となりまするのでありますが、元來佛教其ものが其主義と一致すべき國家を得て理事共に是足すべきものであるならば、支那及印度は確かに其國ではありませぬ、如何に世界の國々を捜しましても我日本國より外は決してこの意義を満足すべき國はありませぬ、此意義より考へて見ますれば、若し世界に我日本國がなかつたならば法華經の大意義を圓滿に具足すべき國家はありませぬ、此大切なる而かも靈妙なる大意義に觸れて大歡喜を起し、「佛法王法に冥し王法佛法に合す」との大獅子吼をなされたのは則日蓮上人であります、  
 『佛法必東土の日本より出べし』と仰せられたのは日蓮上人であります『先國家を祈りて須らく佛法を立てし』と仰せられたるも日蓮上人であります、肇公の跋文を贊嘆し日本國の佛縁を感じ「兩眼滿の如く一身悅を偏くす」と仰せられたるは日蓮上人であります、此特殊の意義ある日本國の國恩を絶大なりと考へられ、國土の恩を報せんが爲首の座に坐られても雄志毫も退轉せざるは日蓮上人であります、法の爲に國を忘れ國

の爲に法を遺るゝは悲むべきことである、法國冥合は日蓮上人の理想であります、されども如何なる國にても同様に國家を重んぜられて法國冥合と考らるゝのでは無い、法より見れば一天四海皆歸妙法、國より見れば八萬の國にも優りたる日本國であります、國土の大小より見ますれば小島であります、存在の意味より見れば世界即日本であります、國土より見ますれば蒙古は大蒙古であります、其存在の意味より見れば小蒙古であります、日本は小なりと雖法華經の大意義一々具足して缺くる所なき大日本であります、佛法興立の資格は日本の外あるべからずとは日蓮上人の確信であります、『我日本の柱とならん我日本の眼目とならん我日本の大船とならん』と誓はれたる日蓮上人の大決心は、我大日本國の天職を感得せられたるの結果であります、我純潔無上にして幽玄微妙なる天來不變本有不滅の神道に高尚なる哲學的の趣味整然たる教理熱烈なる信仰を加へて一段の威力を加へ、理事圓滿に具足したる大靈教を紹介せられ、佛教の眞髓を發揮せられ大

覺世尊の大本願を表明せられたのは實に日蓮上人であります、聖徳太子の御言葉に「神道者爲萬法之根柢儒教者爲枝葉佛教者爲花實」とあると云ふ事でありませぬが、此御一言は實に泰山の動かざるが如く鷲峯の高きが如く拜せらるゝのであります、法華經と融合致しませする我國の古典則神道が根柢となり、此根柢の上に繁茂したる儒教は儒教の眞髓を發揮し枝となり葉となり神道と儒教との土臺の上に花の如く實の如く佛教が其眞髓を發揮すると云ふ鹽梅は實に得も請はれぬ如く思はるゝのであります。

日蓮上人も我國に御出世になり神ナガラの大靈教に觸れ大歡喜を起さずんば、到底佛教の精髓を極めて之を開顯せらるべき御運命に遭はるゝことがなかつたでありませぬ、釋尊の御肉身の御生國よりも聖人孔子の御生國よりも、尊とき御約束を有する此大日本國に御生れになり、神ナガラの靈國の靈氣に觸れて充分に大覺世尊の御付属を御果しになつたものと信ずる外はないのであります、肇公の跋文を讀んで噫し泣に

御泣になつた日蓮上人の御面影は彷彿として眼前に見ゆる如く感ずるのであります。  
 更に終りに臨み一言申上たきは、宗教は果して元來超國家であるべきものかどうかと云ふ點であります。世人の多くは宗教は元來超國家のものである、人類を目的とするもので國家を目的とするものではないと云ふのであります、是は誠に無理ならぬ議論であります、宗教の境界線には山もなければ海もないので、此點に於ては國家と其趣を異にするは無論であります、是は理論上固よりそうでなければならぬ、信仰を助けらる山や海のあるべき筈はないのであります、國家とても煎じつめて見れば同様で必ずしも海や山を以て境するには及びませぬ、國家の威力が増加すれば海でも何でもどしどし縮へて行くので幾らでも廣がるのであります、決して御互に小さくなつて割據するばかりが國家ではありません、併し之は理論の上の事で實際は矢張山水を以て分界されて居るのであります、又宗教はそうでないかと考へて見ますると、宗教とても矢張



其通りて甲の國が舊教で乙の國が新教である、丙は希臘、丁はマホメットと云ふ風に自から地理的分界がありまゝ、この點から見れば、何にも超國家だと云つてそんなに威張るにも當らぬのであります、マゴマゴすると國家よりも小さく區別されて居るのであります、若しも宗教が精神的に世界を統一すべきものであるならば、國家もまた統治の意味に於て世界を統一すべきものであらなければなりません、少くともそうてなければ世界大平和を維持することが出来ませぬ、併しこゝに注意せなければならぬのは、宗教は必ずしも國家の分界と同一の分界を要せぬと云ふ一點であります、之れとても決して究竟目的が出づべき問題ではない、どう致しても世界を統一するのが宗教の目的でありまゝるので、世界を統一すべき意義ある國家にあらざれば全然相提携して進む譯には行かぬのであります、然らば如何なる宗教が世界を統一するかと云ふに、唯一宗教でもないけい、多宗教でもないけい、祖先崇拜教でも他の劣等なる宗教でもないけい、どうして

出来ない國家であると云ふことに氣が附かずに居るなどは誠に以て氣の毒なる次第であります、苟も我日本國民たらんものは、僧俗を論せず此點に深く留意すべきは勿論、殊に日蓮上人を敬仰する我々同志は確たる信念を以てこの意義を信じなければならぬと思ふ、千古一人として我々の尊信する孔子様ですら我日本國の如き國體の存在するを御承知がないので、苦しい思ひをして苦しい解釋をなされて王道を説かれたのであります、流石と云ふては畏れ入りますが、流石に釋迦牟尼如來は神秘的に我國の存在と天職とを御承知になつたかどうかは凡夫の測り知る處でありませぬが、兎に角神ナガラを融合すべき尊と御教を御遺しになり、其尊と御教義は印度や支那では到底その眞髓を發揮すべき資格なく、我國の神ナガラに觸れ且我尊と日蓮上人を待て初めて開顯せられたのであらうと考へて見ますと、佛敎と日蓮上人と神ナガラの間との間に得も言はれぬ脈絡があつて通うて居るを覺ゆるのであります、如此ことは默識神通的作用によりますれば譯もなく背かるのであります、何事も理

も包容同化の意義を備ふる統一的精神を有する神敎でなければならぬのであります、是れと同時に如何なる國家が此敎義を容れて包容統一の天職を全ふし、世界の大平和を維持すべき資格を有するかと云ふに、常住不滅無始無終を意味する大靈徳を敬仰し供養し奉獻し、完全に包容同化の意義を發揮し得べき國家でなければいけないのであります、この點より考へれば、この二つの大なる宗教と國家との間には、超國家だの超宗教だのと云ふべき狹隘なる解釋を容さぬのであらうと私は信するのであります、則ちこの意味より判斷すれば、法華經主義は他の國ならばいさ知らず、我日本國に於ては超國家の議論を振り廻す譯には行くまいと思ふのであります、然るに宗教は超國家なるべしとの意義を過信するの餘り漫然と我日本國を他の國家と全然同一に觀察致しまして、我日本國は果して如何なる國家であるか、佛敎が無始無終の本佛を奉戴するが如く、無始無終の皇室、靈的で申せば御稜威を奉戴する國家を革命を常とする他の國の到底夢想することの

屈のみで解釋したり實行したり致そうと考ふる學理的の先生達、平たく申して見ますれば、道理の解らぬものを信じたりやつたりするのは無學無智の輩であると斷言する先生達には、果して能く解るかどうかは疑問であります、餘り學者の悪口を言入ては済みませぬが、若し理屈の解らん事を信じたりやつたりすることが迷信とか文盲とか申すものと致しますれば、例へば親に何故に孝行せなければならぬものであるか、孝行とは果して如何なる事をするものであるかと云ふ問題を研究し盡さなければ孝行をやつてはいけません、さういふ手合は迷信とか無學文盲とか云ふ者であると云ふ事になります、若し果してそうでありますならば一生かゝつても研究し盡さるゝものでありませぬから、孝行をしようと思ひますときはもう疾く死んで居らなければなりませんので、一生孝行をせずに仕舞はなければなりません、凡そ學究的の解釋は先づ斯んな者でそんなに入ヶ間敷研究せずとも、天地自然にちやんと解る様になつて居ますから、そんな事を言はんでも神ナガラの心持で孝行をするが宜らうと思ひます。



## 力

文學士 小林 一郎

本會も初めは頗る微々たる者で有たが、今日に至つて斯く大なる講堂が立錫の餘地なき程の盛大を來した事は、本會に取つては大成功である、然し聽衆諸君に於ては今迄の演説を聞いて果して満足されたであらうか、恐らく諸君は本會を員が三ヶ年も掛つて研究したのだから、何か耳新しい珍らしい話が聞かれることと思ふて御出になつたやうと考へる、諸君は此演説によりて何か新たな者を持ち歸へる事が出來て満足せられたであらうか、否な諸君は恐らく失望せられたであらう、吾人は素より凡夫である、新たな道に入るのに手を携いて唯だ一通りの演説を聞く位な容易な事で出來ると思ふのは抑も諸君の間違である、若し開座容易なことであるなら、日蓮上人は何故血を吐く程の勉強をなされたか、諸君は失望されるがよい、大いに失望されるがよい、諸君は今晚自家へ歸つて失望

し、寢て明日の朝起きたらもつと失望されるだらう、それでも諸君は自ら手を下して研究し様と云ふ氣が付かなければ、幾度聞に來て、亦た幾度も失望して歸つて、未だ氣が付かなければ失望し抜いた揚句、死ぬ時に成つて成る程と合點が行けばそれでもよい、由來宗教は人を働かして呉れる宗教でなければならぬ、即ち其宗教は人に力を與へるものでなければならぬ、私は先刻から演壇の背後に掲げてある日蓮上人の御像を拜して居ますと、能く拜すれば拜する程、自分は突き倒される様な感じが致します、私共は自分の力が足りなからであるが、若しもつと力を得て居る人は木片微塵に碎ける様な感じがするに相違ない、原動力と反動力とは正比例する、自分の信仰の力が強ければ強い程其の反動力として感ずる力も亦た從つて強い筈である、斯る大なる力のために日蓮上人は苦しまれたのではないか、上人が鎌倉へ出られた時は、襤褸の乞食坊主で、墨染の衣に麻の袈裟で實に見すばらしい者、其の見すばらしい上人は最も不器容に、最も大膽に説き出された、

上人が一と度叫ばるゝや、活き如來と尊敬せられた高僧も、禪宗、眞言宗、念佛宗の碩學も、乃至北條氏の御氣に入りの坊様も悉く力を失つて仕舞つて、獨り乞食坊主の日蓮上人が力を得て、六百年後の今日尙ほ斯る盛大なる會衆を集めてるではないか、此の力も實に上人の信の力である、斯ることを思ふ毎に吾々は一種の力を覺へます、彼の角力取を御覽なさい、上手な手先の甘い角力取は關脇迄は成ることは出來るが、決して大關に成ることは出來ぬ、大關に成るには力である、力ある者でなければ大關には成れぬ、今の世の中の人は、何でも彼でも手先の利く者、利己主義でなければならぬと云ふ風に考へてゐるから淺薄な世の中に成つたのである、然し今迄の遣り口で今後押し通すことは出來ぬ、今後の吾々は何でも大いなる力を養ふて、世界の大關になる覺悟がなければならぬ、先日私方に越後の高田の者が参りまして云ふには、越後は御承知の通り雪の大變降る所ですが、近頃になつて縣廳からの達しで、屋根は瓦葺きに爲なければならぬと云ふこ

とでありました、然し屋根に瓦を葺く位なことは何んでもないが、今此家に瓦をのつけた上に、一丈餘も雪が積んだでは、逆も此家では持ちませぬ、家の土臺から遣り直さんけりや駄目です、然し土臺を遣り直すことは大變ですと云つて居た、現代も恰度其の通りで、土臺石の信仰をふことを忘れてから、學問も智識も成り立たぬ、今の吾人は土臺の石を固めなければならぬ、此が即ち本統の力である、今迄四十年間は歐洲文明の輸入に忙しかつた爲めに、此點に手が及ばなかつたのだ、けれども今後は開座な遣り方では到底行かぬ、今後は國家としては土臺の基礎を固め、個人としては此土臺の力を信仰の力に依つて得て行かなければならぬ、而して列強との競争に能く耐えて行かねばならぬ、又た斯る時代に當つて、上人の教が斯の如く盛んに研究されると云ふ事は實に意味あることである、併し一回や二回の演説を聞いた位では偉大なる力を得ることとは出來ぬ、自ら手を下し、自ら自己の全力を込めて、研究するに至つて始めて信仰の力が得られるので、



諸君が斯様にして總て上人の像に對する時は、突き飛ばされる様な感じになれるのでありませう、又た斯様おらんことを會員及び聴衆諸君に望みます(天時會紀念大會講演にして記者の筆記せしもの也白碧生)

## 國家經綸に關する會同

内務省が神佛耶三教者の會同を企つるや、賛するもの反對するもの相踵いで起り、議論百出して底止する所なく、國民は其歸趣點に迷ふものあるが如き觀ありしも、然れども内務省が特に三教の代表者を一堂に會合せしむるの勞を採るに至りし理由は、床次内務次官の發表したる意見に依りて明白なりとす、吾人は之を國家經綸に關する會同と云ふ、床次次官の第一回私見に云く、

(一) 宗教と國家との結合を圖り宗教をして更に權威あらしめ國民一般に宗教を重んずるの氣風を興さしめんことを要す

を切望す是即ち國家と宗教との結付けを殊に切要とする所以なり

(二) 各宗教家の接近を益密ならしめ以て時代の進運を扶翊す可き一勢力たらしむるを要す。

蓋し宗教の根本義は素より各自一貫したるものなる可しと思惟すれども今日の道德とする所は時勢と場所とによりて其見方説方を異にし常に進化して己まざるものなるが故に神道と佛教とは今少しく歐米に向つて歩みを運ぶの要ある可し顧みれば維新の當時鎖國攘夷を捨て、開國進取の國是を執り日本を擧げて斷乎たる諸般の改革を實行し歐米の列國と共に先づ形の上に於て接近し以て世界一般の氣風に合せんことを勉め爲に長足の進歩を遂げたり神道佛教の同じく進んで世界の進運に合せんと勉むべきこと亦宜しく此の如くなるべし基督教に於ても恰かも自家の殖民地を作りたるが如く固堵を劃して出てざるの觀あるを改め我國體に應じて勉めて人情風俗との調和を圖り此の如くにして其大成を期せんことを望む

念ふに明治維新の當時在來の文物制度を更革するに是れ急なりし爲め勢ひ玉石同焚の迹あるを免れざりき隨て寺院堂の壞れたるものも少からず爾來神佛に對する一般尊崇の念は著しく爲めに毀損せられたり基督教も亦當時少からず嫌疑排斥せられ多く顧る所とならざりしも今は自由を得て布教益勉めつゝあり此の如き既往の事實より推して之を考ふるに當今は正しく宗教をして更に力あり權威あるものたらしむるの愈急あるを覺ゆ。

蓋し國民道德の涵養は教育と宗教と相待つて始めて完きを待べきものなるに現今は教育に由りて今日の道德を教ゆるの實狀なり然れども本に遡りて神と云ひ佛と云ひ天と云ふ所に常に接觸するにあらざれば國民をして公明正大なる思想を堅實に養成せしむることを得ざるべし故に國民道德の基礎を作るには必ずらずや宗教と教育との相待つて進むを要とす是を以て二者の結合を圖り之をして互に提挈せしむるの實を擧げ相率るて以て國民教育の上に竭さしめんこと人或は曰はん若し此の如くするときは神佛基督の三教共に何れも其特色を失ふに至るべしと然れども均しく是れ基督教にして英國に入れば英國の基督教となり米國に入つては米國の基督教となり獨逸に入つては獨逸の基督教となれりさすれば神佛とても外に向つて歩み基督教も亦内に向つて進みたりとて兩者共に現代日本の宗教として優に其特色を發揮するに妨げなかるべし。

此の如く精神界に於て歐米の思想信仰と日本の思想信仰との二者の調和を得るに至らんことは最も切望して已まざる所なり政治經濟の方面に於て夙に開國進取の國是を取り以て今日に進み來りたるは歐米列國と共に文明の惠澤に浴するが爲に外ならず精神界に於ては亦爾かあるべきものと信す。

殊に日本としては歐米の各國と人種を異にするが故に最も此點に留意せんことを要す黄色と曰ひ白哲と曰ふは固より單に外面上の區別に外ならずと雖も猶ほ此相違より生ずる感情の衝突を緩和するには最も



其意を致さざる可らず此點に於ても獨り形の上よりのみならず精神の上よりも一層亦此種の衝突を避くるの用意あるを要す。

蓋し人道は一ありて二なきものと信ずれども世界の文明に参加し列國と共に其惠澤に浴せんには猶ほ政治經濟の上に於て孤立とならざるやうに勉むべきが如く精神界に於ても同じく孤立とならざるやう力を致す所なかる可らず宗教家が互に提挈して國家と宗教との爲に竭すは是の故に極めて至大なる一の使命なりと思惟す。

要する所は宗教をして益權威らしめ一般に之を重んずるの氣風を興し以て國民道徳に裨補する所ありしめ且之に由りて精神界の方面よりも進んで世界の平和文明の爲め貢獻する所あらんことを切望するのみ。

然れども此事たる動もすれば輒ち世間に誤解を來さしめ易く宗教家に於ても亦互に誤解を起すの虞れなきを保せず是の故に十分に意思の疏通を圖り然る後計畫なる如くに誤認す然れども元來長き間の歴史を有して各其特色を異にせるものを打して一團と成し之を統一せんとするが如きは決して爲し得べき事にあらざる固より此の如き無謀の舉に出でんとするにあらざるや言ふを須たざる所なり

第二 往々宗教と教育とを混同するものにはあらざるかとの説あり然れども我邦には從來より二者の間既に分界の劃然たるあり今更之に對して議論を入るの餘地あることなし今回の企畫は何にも教育の中に宗教を混淆せしめんとするにはあらざる唯教育と宗教との二者が相依り相扶け互に提挈して國民の徳育上に今一層の盡力を爲さんことを望むに過ぎず。

第三 或は基督教側の要求を容れて神社崇敬の一條を削除したるやに傳ふるものあり是れ亦誣ゆるの甚しきものと謂ふべし元來我邦にては神社が全然宗教の外に置かるゝことは制度の上に顯然たり故に宗教の會同とは固より關係なきものなり隨て初めより計畫以外のものに屬し之を削除したりと云ふが如きは

徐ろに其事を實にせんと欲し各宗教家間の連絡を取らんと試みたるまでに外ならず。

如上の私見に對し公平の態度を以て觀れば、國民道徳の振興上宗教と教育との兩者の力、相倚り相佐けて裨補する所あらしめんとの眞意にして、宗教と國家との結合を圖り云々の文字を捉へて政教混同問題を論議する一輩の如きは、此の明白なる事理を理解せざるもの愚論なるのみ、更に床次次官は世の誤解謬論の多きに對し、再び詳細に其意見を述べて云く、

今回發表したる三教者會同の事に就ては世上種々の議論ありと雖多くは其眞意を誤解したるものなれば何れも肯綮に中らざるを憾みとす。

第一 今回の企畫は單に三教者をして一堂に會同せしめんとするに在り三教者を合同せしめんとするもの、如くに解するは全くの誤りなり即ち各宗教の本義を各發揮して國家社會の爲に盡力せんことを望むの精神なるを世上動もすれば輒ち各宗教をして各其特性なき合同を遂げしめ以て之を統一せしめんとす。

神社の見解を誤れる失當の憶説たるに過ぎず。

第四 人或は政教一致を圖ると云ひ或は二宮宗の排斥なりと云ふものあり然れども此の如きは全く思ひ設けざる所にして斯る考を有せずと云ふを一言せんのみ。

第五 又或は目するに宗教の利用を以てするものあり然れども毫末も之を利用せんなどの考へを有することなし且改めて言ふまでもなき事ながら宗教はもと利用する、性質のものにあらざる故に始めより唯各宗教が共に其本分を盡くし十分に社會人心の指導に勉むるあらんことを希望したるのみ。

第六 更に非難して言ふものあり曰はく内務省が斯る計畫を爲したりとて果して幾許の實効を收むることを得べきかと然れども精神とする所は單に三教者を會同するに在り別段之に由て仕事を爲さんとするにはあらざる唯此會同に依て世間一般の人心に刺激を與へ政治教育宗教の三者が互に相侵さず相尊重し合つて國家の進運に資するの端を啓かんとするのみ。



念ふに斯る會同に依て仕事をすると云ふは二回三回と幾多の會同を重ね互に意思の疎通を得たる後の事に屬し今日に於て多きを望むは望む者の誤りなり單に三教の人々を會同せしめんとするに就てすら種々の浮言流説を生ずること既に此の如し況んや其れ以上の事に於てをや。

第七、今回基督教を同時に會同するの趣旨は曩きに陳べたる意見書によりて明かなるべしと雖學者並に宗教家間に基督教と俱にするを好まず之を目して國民の徳育に利ならずと爲す者あるが故に尙ほ茲に一言するの要あり信教の自由なる今日既に日本に存在せる一宗教に對し一視同仁を以て之に臨むべきは固より言を待たず此の如くにして基督と共に進運の爲にせんとするは即ち之を誘導して同じく尊王愛國の精神に歸趣せしむる所以たるべく徒らに之を排斥するが如き態度を以て之に對するは甚だ雅量なきの事たるのみならず寧ろ却て反抗の念を起さしむるに止まるべし是れ人情の常にして思慮ある者の宜しく心

寧ろ漸次に不良ならんとするの傾向あり從來の如き情誼上の關係は日に益薄くして單に小作料を授受するに止まれる經濟上のみの關係とならんとするは今や掩ふ可らず此の如くにして各階級間に於ける温情の漸次失はれんとするは現今最も慮るべきの事なりと思惟す殊に細民部落などの實狀を觀るに家庭の間一も温情の通へるものなきを多しとす是等は社會改良上更に塞心すべきものたるべし然れども是等の事たるを單に經濟上の關係のみを以て決して十分なる解決を見得べきものにあらざるを救済するの道としては精神上の慰安を與へ如何に陋巷にありとも中に自から安んずる所あらしむるを要す此の如くにして精神上の慰安を與へんとするには必ずや宗教を待つ所なきを得ざるに至るべし。

且夫れ現今國民の義務教育とする所は六箇年の小學教育に在り然るに徴兵検査の際に於て其實際を見るに智育の方よりいふも學校に在て修め得たるの事は隨分之を忘れたるの實あり之より推して考ふるに徳

を用ゆべき所なり況んや精神界の事は固より行政權を以て左右し得べきものにあらざる宜しく宗教は宗教を以て相磨礪するの途に出でしむるを得策とするを殊に歐米の列國は今尙ほ往々にして我邦を誤解し排外思想を含める道徳の涵養にのみ重きを措くもの如くに思惟するの實なきを得ず隨て此際精神界に於ても開國進取の方針を採るは國運を世界平和の裏に置く所以なりと信す。

以上の諸點は今日世上に起れる誤解の主なる者の如し凡そ一國の文明開化は獨り物質的方面の發達のみを以て満足すべきにあらざる精神的方面の發達亦之に伴ふべきは言ふまでもなき所なり近來は資本家と勞働者との間に於ける衝突の事例も漸く少からざらんとす將來工業の發達進歩に伴ひて彼の歐米社會に於ける一種の惡風も益我邦に入り來らんとするは已むを得ざるの事たり而かも是れ獨り都會に於けるのみの問題にあらず田舎に於ても地主と小作人との間柄は日に増し良好に向ひつゝありと云ふことを得ず

育の方に於ても殆んど同一の状態に在るものと思はる是の故に十二歳を以て義務教育を終りたる以往の一生を通じて尙ほ能く道徳心を堅固に保持し行くことを得るや否や極めて安心し難き事と思ふ固より理性にして苟くも發達するあらば是非の判斷を誤らざるべき筈なれども少年時代に於ける六箇年間の教育のみにては是れとても十分なることを得ざるべし中等以上の教育を受けたる人ならば兎も合理性も明かなるべしと雖其れさへ一生を通じて道徳心を堅固に保ち行くことは至難の業たるべし故に學校の教へたる所をば社會も亦保護して健全なる發達を遂げ得るやうに圖らざるべからず是に於てか必然の順序として社會教育の必要を生ず而かも是れには宗教の力最も大切なるべし加之六箇年の義務教育を以て終るの人は國民の大部分を占むるが故に日本國民全體の徳育問題としては單に學校に於ける徳育のみを以て安心し得ざるや固より明白の事たりと信す。

殊に交通機關の發達と共に世界は益狹さを覺ゆ列國



との境界も漸次接近したるの實あり故に今の時に方り愈以て民心の堅實なる發達を圖り益國運の基礎を固らし置くの要ありされば今日我邦は各種の方面より互に相依り相扶けて十分に國家進運の爲に盡す所なかるべからずと思ふ區々たる小感情に制せらるゝことなく眼を大局に注いで十分に此問題の利害得失を講究することは此際切に希望に堪へざる所なり。

この公表意見に依り益會同の眞意明瞭となりしも或者は所謂理性の判断透明を缺き、徒らには是非の妄論を逞ふしつゝありしが、内務省は二月十六日付を以て三教者管長及代表者に通知狀を發送せり、二月二十五日大懇談會を華族會館に開く、會する者七十有一名、政府側より原内相、床次次官、斯波宗教局長、井上神社局長を始め、林遞相、小松次官、松田法相、平沼次官、齋藤海相、財部次官、福原文部次官、田所學務局長、竹島陸軍省副官等の出席あり、而して原内相は莊重の態度を以て一同に挨拶を試む

今回諸君を御招待せし處斯く多數諸君の來臨を得親

たるものならざるは知るべきのみ。

三教者代表者は二十六日華族會館に會し、懇談熟議左の案を決議して其精神と要望とを表明せり。

吾儕は今回三教者會同を催したる政府當局者の意思は宗教本來の權威を尊重し國民道德の振興社會風教の改善の爲に政治教育宗教の三者各其分界を守り同時に互に相協力し以て、皇運を扶翼し時勢の進運を資けんとするに在ることを認む是れ吾儕宗教家年來の主張と相合致するものなるが故に吾儕は其意を諒とし將來益々各自信仰の本義に立ち奮勵努力國民教化の大任を完うせんことを期し同時に政府當局者も亦誠心銳意此精神の貫徹に努められんことを望み左の決議をなす。

一吾儕は各々其教義を發揮し皇運を扶翼し益々國民道德の振興を圖らんことを期す。

一吾儕は當局者が宗教を尊重し政治宗教及教育の間を融和し國運の伸張に資せられんことを望む。

三教徒この決議を公にするや、之に對して無意義の決

しく諸君と御懇談をなすの機會を得たるは小官の最も満足する所なり。

此御招待に關し世間には種々の議論あるが如しと雖小官が本日諸君の來臨を煩したる次第は他意あるにあらす從來人心を指導し風教を振興するに就て諸君が各宗教の立場よりして多年盡力せられつゝあることは夙に認識する所にして又深く感謝する所なり而して世運の進歩と共に精神界の健全なる發達を圖り社會狀態の改善をなすことに關し今後諸君の盡力に待つ所多大なるに因り諸君と一堂に會し御懇談をなすことは小官の久しく切望したる所にして即ち本日御招待をなしたる次第なり諸君幸に此意を諒とせられ將來益々國家の爲に盡力せられんことを望む

吾人は原内相の挨拶に見るも、政府が二宮報徳主義を鼓吹するが如き意義に於て、三教者を一堂に會せしめたるにあらざるは勿論、各宗教の立脚に起つて人心を指導し風教の振興を圖るべきを要望しつゝあるにあらすや、政府固より宗教利用の政策よりこの企てを爲し議なりとの評論を加ふるものありしも、吾人を以て見れば、評者未だ宗教と國家との關係を會得せざるもの如し、漫然宗教先天の本質を説いて其國家との關係を失却するが如きは、我國精發展の上に一大注意を拂ふべき言論にして、吾人は即ち斯かる思想を轉化啓導すべき必要に於て、この決議が時弊を救ふに力あるを覺ゆるもの也。

三教者會同に就て各地より多數の宗教家來京したるを期とし、井上中島高楠元良姉崎南條博士等發起者となりて、二十八日宗教家教育家の大懇親會を上野精養軒に開く、來會者二百十一名、文學博士井上哲次郎君は發起人を代表して一場の演説を爲せり。

今夕宗教家教育家の會合を催したるは決して内務省の内命を受けたるものに非ず内務省とは何等の關係あることなし只だ今回内務省が三教者の會同を催たるに就て宗教家が多數來京せしに依りそを期として宗教家教育家の懇親を結ぶ爲め此會合を催したるものなり而して今夕は神佛基の宗教家と學者教育家の寄り集れる珍妙なる會合にして決して列國にも見ることを得ざる會合なり蓋し外國には神道あらざるを以てなりまた世間は此の會合を見て頗る奇異の感を



抱き居るやうなるが、それは今後之を屢々催すことに依つて其等の感を無くすることを得べし故に此會合は今後も度々催すことに致したし猶ほ三教者會同の時三教者が決議したる事は單に一場の決議とせず永久に其精神を以て進み皇運を扶翼し國家の爲め益々奮勵せられんことを希望して已まざる也。

從來融和を缺ける宗教家と教育家の兩者が、一堂に相會して握手し懇談するが如きは、井上博士の言ふが如く世界に未だ此舉ありしを聞かず、兩者俱に襟度稍や瀟大なるものあるを觀る、之れ實に國家經綸上慶賀すべき現象なりとす。

斯の如く初めは内務省が、宗教と施政との關係密接を圖るが爲に企てたる會同も、遂に天下の學者教育家の思想を動かし宗教教育家の懇親會となり、互に握手して國民道德の振興に努力すべきを約するに到りしは、一部の標識なる信仰自由論者の反對ありしとは云へ、今回の會同が國家風教上多大の效果あるを疑ふを得ざるなり。

彼れ信仰自由論者は、宗教は絶対の權威を有し國家と何等交渉を存せずと主張するも、這は一種の病的愚論なるのみ、固より宗教は絶対の權威を有し亦自由な振興に力を致すべきものにあらざるや。

また或一部の教育論者は、國民道德の涵養は現代の教育制度に於て完備せりと主張し、宗教感化の靈力を要せずと論ずるものもあるも、床次次官の意見の如く現代の教育制度に於ては未だ德育の完きを讃歎するを得ず、蓋し國民の生氣國家の興隆は德育の深淺に繫はる所甚大也、而して德育問題は國家經綸上重大なる問題にして一日を緩ふすべきものにあらざるは明かなり、然るに現代の制度のみにては力未だ偏からず、之を宗教に頼りて振作するに至らば其結果顯著なるものあるに到るべきや必せり、固より教育に宗教を混同し宗派の異同を學校に容るべきにあらざるは明白の事なり、然れども一部の論者及從來政府の教育方針を見ればこの混入の弊を防ぐに銳意なるの餘り、學校教育によりて人間固有の宗教性を無視し、宗教を人心より排斥するが如き措置を取り、教育者をして自ら宗教的信念なき人たらしめたるの嫌あるのみならず、延いて一般人心の上に於ける宗教の感化をも妨ぐるの事態を生じたり、斯の如く教育が宗教的感化を疎外したるの結果は、現代の如く徳風名教の頽廢を來たし、現實主義自然主義乃至破壊思想の勢力を助長せしめたるは、一大

るものなりと雖、而かも宗教は人間界のものたると同じ時に國家を離れて其存在を認むる能はず、宗教が個々の精神に向上と満足を與ふると共に國運の興隆を期圖するは本來の特色にして、之が爲に爲政者と協力和衷の舉に出づるは至然の措置なりと云ふべく、何等比間に一點の疑問を挿むの餘地あるを見ず、而して爲政者が宗教の權威を尊重して適當の施政に出づるは亦當然の責務にあらざるや、近年社會體制の變遷と思想道德の混亂は、延いて人心の動搖或亂を來たして一切の權威を無視せんとするの傾向を生じ、其極は國家の組織に對し反抗的態度を執る者あるを出せり、此等危險なる思想に對しては、上下舉て志を協はせ之が防遏に力むべきは勿論なるも、思想の根柢より人心を匡正して信念によりて人を正路に導くは、特に宗教家の任務にして一段の努力を要する所也、然れども宗教家如何にこの方針に全力を注ぐと雖政府の施政にして宗教の信念を輕視し、或は之を排斥するが如き事あらば、反て宗教感化の事業が其實績を擧ぐるを得ざるのみならず、進んでは人心の歸嚮を亂すの虞れなしとせざるを得ざるなり、故に施政者は宗教を尊重し其感化力を認めて適當の方法を採り、宗教家と聯絡を保ちて國民道德の事實にして争ふことを得ざるなり、されば一方宗教家は自ら戒飾し奮勵して國家の爲に人心感化の事に盡すと共に、政府も亦教育社會をして宗教的感化の忽かにすべからざるを熟知せしめ、學校教育に於ても宗教性を尊重して信仰の萌芽を愛護するの方針を立て、教育と宗教とが各其本來の天職を盡すと共に、相依り相輔けて社會人心のために又國家安寧のために努力し得べく、政府が其方策を講ずるは宗教を教育に混入するものならざるは明白にして、兩者適當の按排施設を得るにあらざるは、國民教育の實績擧らず道德の大本爲に危殆からんか、吾人は這般人心感化の大問題には、世の淺見者流なりと雖漫りに輕舉妄論を加ふるを戒む。

要するに三教者の會同が、一面宗教家の自覺を新にし、一面教育家の襟度を宏量ならしめ、更に政府をして宗教と教育の力相待つて人心感化の實績を擧ぐべきを諒知せしむるものありたり、而して亦國民を思想問題に注意を拂ふべき傾向に導きたるは疑ふべくもあらず、請ふ此機會に於て、各々其本務に勉めて三教者決議の本旨を意義あらしめよ



### 國民革正の運動史

#### 天晴會

二月十七日第三十五例會を九段敷上富士見軒に開く佐藤大佐宮岡中將等を先頭として熱心なる大主義の擁護者は詰めかけ來り各種演説を聞いて國家風教の問題國民道徳の振興策に關して其所信を交はし日蓮主義の信念發して何となく意氣昂然たるものあるを觀る定期に至るや神崎文學博士は道徳の基本と法華經と題して發壇古來よりの道徳上の諸學説を擧げて其の學見の缺點を指摘し進んで道徳の根本は慈愛と權威との關係なりと云ひ。慈愛は同情の生活である一己丈夫の生活にあらずして人と共に生活することである吾人の生活は身心共に此精神を失はば自己は亡くなるのである吾人の身體は親とつながりがある而して非親此體は無始以來の父母の生命が現れて居つて世界と共に生活する處がある物質でもさうであるが思想の上に於て一己の自己の占有ではない多くの者に依つて作り上げられて居る古今を通じて一切衆生と共同し同情の生活をして居る如きは慈愛なりと云ふて法華經には妙法を持つ者は如來の室に入ると説かれ亦亦草品は道徳の根本たる慈愛を現はして居る亦亦道徳的觀念には權威の事實を認めればならぬ權威に於ては夫兄弟の關係然る法則を在す人は其分其地位を持つて秩序あるを知らねばならぬ法華經には十如是を戒いて熾然たる秩序を示して居る此秩序を持つて道徳の上に實行

#### 知見會

二月十日が四回講演を淺草慶應印寺に開き山根會長の熱誠なる勸誘により參聽者一百餘名を得たり此會は時間の約束を守ることも最も堅く午後一時半法を行ひ正二時より帝大文科大學生中川君は日蓮主義の修養と題して燃ゆるが如き熱心で平易に且つ解明に日蓮主義に於ける精神修養の妙談を爲し世間用布教師に於て含めて食すが如き懇篤なる講話ありて聽衆に法悦を興へ午後四時半閉會を告げしが同會は一回ごとく順序よく修養を呈し熱誠なる求道の士女を出すに至るべし尙ほ同寺本橋總代は羽織袴の禮装にて毎會幹旋の勞を取られ親ら著音器の演奏をなして來詣者に聴かしたる採球の事と稱すべき也

#### 地明會

二月十一日第八例會を青山安川邸に開けり既に日蓮主義の靈光に照され法悦の境涯に在る會員は氣品何とのう高く慈愛溢るる風貌ありが如く覺ゆ定期修法の後山根日東師は古來より其罪を惡んで其人を惡まずと云ふ一旬より説き起して同情と理義との意味を説き日蓮主義は惡人なりとも誦斥せざるのみならず其犯せる罪をも信仰の靈力に依りて滅し得べき所以を論じ各宗教の罪に對する理想を辨して精神の秘奧に響きを興へ本多大僧正は「佛陀とは解脫者にして一切智者覺者なり又吾人の開導者であるが故に無始より無終に亘り慈悲の活動である凡そ人として慈悲の精神はあるべきである親が子に對する凡ては皆慈愛である佛は善量品に示すが如く或示己身或示他身と云ふて常住に活動せられて居るに於て惡人も善人も守り下されて慈悲を垂れて居られる信不信皆悉く靈光が輝いて居る惡人でも改心して佛に向へば直に佛性に接することができると信するに於ては常住不滅の絕對の本佛を信せなければいけぬ此信仰に因りて救へたる人格を作り上げるのが大事であ

#### 國明會

同會生れて茲に一週年一回の休會をも爲さずして精進勇猛の聖訓を行ふ會は未だ盛んなりと云ふを得ざるも青年にして唱題する者官吏にして殊數を持つもの四五を養ふを得たり會衆少なしとて無意の念を起すはまた能致爲一人の經意を味讀せざるもの一人の爲にも能く全力を傾注して大法の益を興ふべきもの也二月十八日午後一時より淺草常福寺に記念講演を開く關田布教師は日蓮上人の偉徳を諷し佛陀の慈悲を説き信仰の力と本佛救済の感歴とを詳論して未信者の佛性を啓蒙し已信者の信仰を進むるものあり上幹事は教の尊重すべき所以と日蓮主義の特色を示して講演を終

#### 親善會

同會は鈴木日根君の熱誠なる常時の法話とまた勸誘に勤むるがため毎回聽衆の數を増し益々盛會に起きつゝあり二月二十五日午後一時より淺草關帝寺に開く觀音なる修法の後三上統一記者は信仰法悦の境涯を説いて關目抄の末文を引證し現在の信仰即未來大樂の覺果を得べき所以を説き關田布教師は信心強盛の功徳を述べ本佛大慈の救済力に及び幾多の學說研討も遂に信仰に入るべきものなりとて強き信仰を策勵し午後四時會を閉ぢたり

#### 思恩會

三月五日午後六時第三回例會を淺草妙經寺に開く來會者五十餘名にして四恩報謝の法要を行ひ海野幹事の聖語誦讀鈴木善建君の歌と修養に就て有益なる講話あり日蓮主義は實行教として人道の實行を促がし日蓮主義は實行教なり口と心とに讀むも身に行はれれば何等の價値なく日蓮上人と日朝上人との關係は眞に眞き模範なりと説き終りて統一節と云ふ小松原の夜嵐し(御舞)其他二三の語り者などありて盛會なり

#### 妙教人

二月十六日淺草法成寺に開く本多大僧正の講義として聖祖降誕報恩の法要を行ひ野日僧正は「日蓮」と題して祖師を引く法の上より國の上より日に際する意義を説き本多大僧正は「報恩謝徳」の講義にて上人一代の活動は吾等の爲にして心腹の眼を開かしめ給ふ其德其恩眞に洪大なり恩を知り徳に酬ゆるは人道上の要義なれば我信仰に住する者は堅く聖祖の信仰を把住し奮勵すべきを説き多々の感動を興へ茶菓の供養ありて隨意會として閉じ

#### 青年會

同會は從來人倫道徳上の精神修養の爲め月二回の講演を開き來りしが滿二ヶ年の訓育教導に因りて自然に日蓮主義の光明に照れ其講話を聴かんとする者多く故に三月より一回は日蓮主義一回は人道上の講演會を開くに決し其第一初會を三月一日午後六時より淺草法成寺に開く帝大文科生中川君は宗教傳播の必要より説き起して日蓮主義の五綱の教訓に及び之を解説して日蓮上人の卓見を傳へ三上統一記者は人は氣節を以て活き氣節を持つて正しく進歩すべしとて上人一代の純潔なる氣節を紹介し上人の氣節は模範的なるが故之を學ぶべきを促がし關田會長は信仰上慈恵の妙談を説いて日蓮主義の尊きを誨へ一種の神秘靈光を放てり會する者六十餘名悉く有爲の青年のみなり

#### 知見會

二月十日が四回講演を淺草慶應印寺に開き山根會長の熱誠なる勸誘により參聽者一百餘名を得たり此會は時間の約束を守ることも最も堅く午後一時半法を行ひ正二時より帝大文科大學生中川君は日蓮主義の修養と題して燃ゆるが如き熱心で平易に且つ解明に日蓮主義に於ける精神修養の妙談を爲し世間用布教師に於て含めて食すが如き懇篤なる講話ありて聽衆に法悦を興へ午後四時半閉會を告げしが同會は一回ごとく順序よく修養を呈し熱誠なる求道の士女を出すに至るべし尙ほ同寺本橋總代は羽織袴の禮装にて毎會幹旋の勞を取られ親ら著音器の演奏をなして來詣者に聴かしたる採球の事と稱すべき也



正法護持

二月十二日品川妙國寺に於て開鏡...

二月十五日午後二時抄國寺に於て本佛涅槃...

養徳兒童會

二月十七日午後一時その本部たる抄...

交親會

一面には通俗的に佛敎の眞味を下層...

京都教報

敬愛佛の精神を打して人心を驚服せしめ...

二月十一日二條妙通寺に於て講演會を開き...

經王會

近來各地の敎徒が其本分を自覺し傳...

天晴會

二月二十四日午後六時より清水町妙...

東海道教報

見付第一義會

遠州一帯は曹洞宗の領域にして日宗...

正頭會

二月十二日遠州吉津村坊瀬妙源寺に...

教學財團基金申込報告

特別會員

東京市赤坂區青山町五丁目 繁種...

通常會員

千葉縣千葉郡東村村上泉 猪野友吉...

贊助會員

千葉縣上泉寶泉寺檀家 金五圓 白井牛次郎...

千葉縣太田萬光寺檀家

猪野長三郎 猪野長三郎 猪野長三郎...



金壹圓 小高仁太郎 金壹圓 內海 村司  
 金六拾錢 關屋茂作 成川德藏 關屋 明  
 森川つゝ 關屋庄太郎 森川國松  
 金五拾錢 關屋吉太郎 關屋覺市  
 金壹拾錢 關屋太五郎 外三名  
 金廿五錢 森川 文藏 外五名  
 金貳拾錢 水島川菊藏 外廿六名  
 金拾錢 小倉 善藏 外七名

**教學財團基金受領報告**  
 第四拾貳回 (明治四十五年二月廿九日迄到者分)

金拾圓(三) 千葉縣用草真福寺檀 赤地惣次郎  
 金五圓(四) 神奈川縣榎本長寺 檀 家中  
 金貳拾圓(十完) 東京牛込久成寺 檀 家中  
 金貳拾圓(十完) 全 寺住職 同井月見  
 金六拾圓(一) 京都妙給寺檀家 同田辨之助  
 金壹百圓(三) 千葉縣榮王寺住職 中田日達  
 金貳圓(一) 全縣小林運成寺住職 澤井通輝  
 金拾圓(四) 東京品川清光院 檀 家中  
 金壹圓(五完) 全 全院檀家 加藤 春吉  
 金百貳圓(半完) 千葉縣眞淨寺住職大和久無外  
 金拾圓(五) 千葉縣草刈行光寺檀家嶋田友七  
 金拾圓(五) 全 中村初太郎  
 金八圓(五) 全 木津 昇  
 金貳圓(四) 兵庫縣妙立寺內 水野 乾誠  
 金貳圓(五) 全 寺檀家 松島 ラン  
 金壹圓(四) 全 杉山 キシ  
 金拾六圓(五) 千葉縣國府關法泉寺住職平法順  
 金參拾圓(四) 全縣臺方妙福寺 檀 家中  
 金拾圓(一) 全縣臺方妙福寺住職 錦織日就  
 金貳圓(三) 全縣臺方妙福寺住職 西村會之

神子戸龜吉 青井善太郎 參拾錢 末  
 森庄太郎 美西富五郎 峰谷俊郎 壹圓六拾  
 錢 栗山久吉外九名(以上第四回)  
 貳圓 金拾圓(二) 住職吉田義着 拾參圓五拾錢  
 小田敬忠(四、完) 六圓參拾錢 横山平兵衛  
 (三、完) 四圓五拾錢 山添兼吉(四)  
 ● 廣島縣多治比大徳寺寺檀  
 金五圓 住職天崎會温 四圓 岡本嘉八 貳  
 圓 中村勘市 世其三郎右衛門 壹圓半  
 丸山タキ 七拾錢 世其彦右衛門 六拾錢  
 世其市太郎 全梅吉 五拾錢 世其初太郎  
 全徳造 四拾錢 世其廣造 全啓太郎 全登  
 市 見坂多吉 參拾錢 眞野嘉吉 五拾五錢  
 世其時太郎外三名(第四回)  
 ● 千葉縣喜多壽福寺寺檀  
 金拾圓 住職今井日吉 五圓 澤喜三郎 貳  
 圓 吉澤伴治郎 森庄五郎 植田辨造 七  
 拾錢 森彦太郎 吉澤松造 四拾錢 高山  
 松平(第五回完稿)

金五圓(八) 神奈川大豆戸 本乘 寺  
 金參百圓(壹) 東京本教寺檀家 安川 繁種  
 ● 靜岡縣大土肥妙高寺寺檀  
 金參圓 住職木下國通 壹圓 宛神尾茂右衛門  
 今井辰之助 七拾錢 渡邊豊吉 六拾錢  
 今井善作 青野豐作 長島徳次郎 青野高藏  
 廣井善藏 五拾錢 松井金次郎 四拾錢  
 青野善吉 石井彌兵衛 松井嘉三郎 梅原房  
 五郎 參拾錢 大庭忠平 古川文次 貳圓  
 吉田榮助外十二名(第五回完稿)

**廣島縣井原高源寺寺檀**

金八圓 中村實一 三浦藤四郎 四圓  
 世羅直藏 中村孫一 加藤京平 佐藤信太郎  
 加藤友一 加藤彌十郎 加藤信次郎 福原春  
 作 世羅徳松 世羅り也 世羅宮藏 世羅孫  
 三郎 世羅小三郎 世羅牛四郎 世羅孫四郎  
 世羅忠四郎 金貳圓八拾錢 世羅清太郎  
 貳圓四拾錢 世羅徳松 貳圓 住職堤正音  
 中村壽吉 中村儀右衛門 加藤徳太郎 加藤  
 又市 世羅家四郎 全喜太郎 全保五郎  
 全本藏 全力太郎 全萬吉 全仙太郎 全伊  
 三郎 全貞平 全直四郎 全榮吉 全市藏 全伊  
 前藏 全助三郎 全喜代藏 全政吉 全元平  
 壹圓六拾錢 世羅初藏 全周藏 全要吉  
 全文九郎 全泰吉 全恒藏 全新吉 岡崎幸  
 三郎 壹圓廿錢 世羅石太郎 全武市 全龜  
 太郎全共七 全仁吉 全仁六 荒川重吉 世  
 羅助四郎 壹圓八拾錢 世羅徳次郎 壹圓  
 加藤仲吉 全金平 全藤三郎 八拾錢  
 世羅佐市 加藤徳平 世羅彌市 全百太郎  
 六拾錢 向井末太郎 吉田實一 世羅香平

**神奈川縣小田原妙經寺檀家**

金六圓 川島竹次郎 參圓六拾錢 益田點  
 左衛門 飯田榮助 猪俣大吉 岡時勇次郎  
 中戸川忠右衛門 中戸川萬五郎 中戸川芳太  
 郎 石川忠藏 中戸川好治 星野喜三郎 參  
 圓 龜井國造 小澤柳吉 門松米吉 壹圓  
 八拾錢 青山丑五郎 長野角藏 清水七兵  
 衛 壹圓半 岩城萬造 栗田寅吉 田代兵  
 太郎(第八回完稿)

**岡山縣草生久成寺檀家**

金六圓 岩藤茂登造 參圓 岩藤榮三郎 貳  
 圓四拾錢 橋原安次郎 貳圓 橋原初五郎  
 岩藤十郎治 巖波辰次郎 壹圓 岩藤順四  
 郎 全治太郎 全安太郎 安東音五郎 岩藤  
 武八郎 南藤孫太郎 橋原武四郎 全住三 全  
 忠造 野上五郎三 八拾錢 岩藤勤三郎 田  
 中庄太郎 安光彌三郎 六拾錢 橋本要  
 三 岩藤彦四郎 全福四郎 高原勇造 全儀  
 太郎 長田藤太郎 五拾錢 高原安次郎 全  
 儀三郎 全秀太郎 下山倉太 四拾錢 高  
 原種三 南朝千代松 岩藤祐太郎 安光音吉  
 全登茂 全末吉 橋原和三郎 全五郎三 全  
 唯次郎 全竹治 河原八十吉 參拾錢 高  
 橋興作 橋原才一郎 全市右衛門 下山爲造  
 河原彌介 土手砂五郎 長田さわ 明石いし  
 長濱房太郎 村上伊佐三 廿五錢 末高長五  
 郎 貳圓八拾錢 巖波敬次郎外十三名(以上  
 第四回)

**千葉縣下野本泰寺檀家**

金六圓 飛鶴志平 貳圓 伊藤千代吉 伊  
 全トメ 全文藏 全三藏 全清八 四拾錢  
 向井増次 中村和三郎 全精之助 加藤助  
 全在助 全藏 全忠四郎 世羅力藏 廿八  
 錢 谷岡九八 二拾錢 世羅國兵衛  
 (第四、五回完稿)

金壹圓 花澤元修 鈴木幸吉 八拾錢  
 古川靜一郎 高橋源太郎 六拾錢 齋藤吉  
 三郎 花澤時次郎 古川伊之松 飯島芳吉  
 古川銀太郎 谷川次藏 谷川國太郎 古川長  
 八 古川玄澄 四拾錢 平塚源太郎 古川  
 要 八拾錢 中北安藏外三名(第五回)

**岡山縣和氣本成寺寺檀**

金拾圓 秋山泰二 拾圓 藤本太平 呼  
 井庄吉 七圓 恒次徳次郎 五圓 河口初造  
 四圓八拾錢 藤本達次郎 四圓 岸本龜次  
 郎 住職原田容實 參圓 蜂谷喜代松 貳圓  
 廿錢 高波六郎次 貳圓 三木宗平次 貳  
 圓 田保太郎 松本輝三 村上重兵衛 呼井喜介  
 墨田嘉太郎 壹圓六拾錢 木村良造 稻葉  
 榮十郎 壹圓半 浦上登吉 壹圓四拾錢 日  
 笠猪平 近藤石造 壹圓貳拾錢 恒次利平  
 今井良太郎 芳井兼吉 壹圓 新田伊三郎  
 我澤和乎次 秋山東三九 竹内卯吉 蜂谷淺  
 次郎 竹内利喜三 岡本才三郎 石野吉次郎  
 八拾錢 松本林造 日笠岡五郎 浦上彌三  
 次 土井嘉右衛門 青山久三郎 藤橋世平  
 野田岩次郎 杉本岩次郎 六拾錢 小山實  
 三郎 土井實三 赤塚節造 延原壽美太 五  
 拾錢 末森彦次郎 四拾錢 大野音五郎  
 的橋進次 末藤大吉 浦上藤四郎 和田原次

**千葉縣大成安立寺寺檀**

金參圓 安立寺 壹圓 加藤豊吉(以上第三  
 回) 貳圓 森勇吉 森徳次郎 壹圓半  
 高山吉太郎 六拾錢 森丑松 五拾錢 森勇  
 八 壹圓廿錢 森岩次郎外八名(以上第二回)

**千葉縣權名常福寺寺檀**

金四圓 住職山形眞瑞 參圓 山田順治 貳  
 圓 古川豊吉 金子市太郎 壹圓 古川  
 禎次郎 國吉清左衛門 八拾錢 布施勲次  
 郎 田中重次郎 野崎謙之助 七拾錢 山田  
 吉次郎 六拾錢 國吉勇太郎 五拾錢 前田  
 角右衛門 四拾錢 山田庄吉 參拾錢 三  
 枝清太郎 野崎新助 野崎會作 前田清藏  
 田中時藏 貳圓六拾錢 山田三郎外十二名  
 (第一回)

**千葉縣上泉室泉寺檀家**

金五圓 橋本壽 猪野友吉 猪野謙三 參  
 圓四拾錢 猪野修一郎 參圓 千鳥秋輔  
 猪野幾三郎 全喜代治 貳圓 猪野武兵衛  
 全喜三郎 小出謙次郎 全清三郎 岡田源八  
 猪野啓一 若菜喜太郎 高橋善太郎 牧野喜  
 代繁 増田淺吉 全作太郎 山本清作 全久  
 三郎 全久太 壹圓 若菜喜平 白井牛次  
 郎 清宮久太郎 牧野巳之松 全直次郎 小



出長吉 猪野喜平 岡田仙之助 小出三之助  
橋本和 猪野子之松 全三三郎 全善太郎  
小出孫作 猪野政吉 金子新藏 石原松次郎  
猪野林之助 五拾錢 時田寅吉 四拾錢  
猪野宗作 小出用助 猪野伊助 大川彌三郎  
壹圓 岡田半次郎外七名合計(第一回)

●千葉縣眞里谷本寺寺檀

金拾貳圓 住職岩崎會眞 四拾錢宛 笠川常  
吉(四) 全人(五) 全彌吉 中崎源四郎 全  
雪次郎 中村藤松 金子貞次郎 山崎峰吉  
參拾錢宛 山崎助次郎 見富兼吉 鶴岡吉之  
助 池之内茂右衛門 野村近藏 鈴木清兵衛  
中村たつ 全忠吉 壹圓四錢 野村軍次外四  
名(第五回完結)

●千葉縣黒戸玉泉寺寺檀

金參圓(五) 住職藤平法順 七拾錢宛 白石  
治太郎 松崎祐藏 六拾錢 松崎實藏 五拾  
錢 石井常吉 四拾錢宛 松崎喜一郎 大塚  
民五郎 參拾錢宛 田中六太郎 廣武助 米  
本伊之助 壹圓八拾錢 廣庄之助外十二名合  
計(第四回)

●同 縣内田立本寺檀家

金貳圓(二、三) 金枚伊三郎 壹圓四拾錢  
(三) 御園生兼吉 壹圓宛(五、六) 薄胡嘉  
吉 小島玉太郎

●同 縣太田萬光寺檀家

貳圓 藤田憲藏 壹圓半 杉田實吉 五拾錢  
宛 鬼原文司 關忠吉 廿五錢宛 鶴澤菊五  
郎 鬼原次郎 關忠安三 壹圓廿八錢宛

宮殿●須彌段

前机●幢幡

御來店の節は陳  
列場へ御來車被  
下度は是れ迄とは  
一層勉強仕一切  
各宗の佛具陳列  
仕置候

正價三法堂佛具發賣目錄

注意

佛具と唱すれども此の種類數品有之候を以て一々記載する能は  
ず。依て特に佛具正價附發賣目錄書を以て御入用の  
諸君は。佛具正價附發賣目錄書を以て御入用の  
御覽あれ。寺院機方の御入用品一切の買物何程遠方でも各  
の買物安値にてき升。早く取よせ御覽あれ其の正價附の品は  
左の通り

●佛具一切 過去帳の類 大般若經 一切經 理應分 立牌 大般若  
佛具金物一切 釣鐘 半鐘 木魚 拂子 曲鉢 香 珠數 大傘 被  
子 中啓香筒 鍍金鐘類 水引打敷 和幡 香桶 人天香 樂器類 鹿  
三寶譜寶堂に平輪 佛起香 煎茶湯器 煎菓子 行鉢 量器 白鉢 水  
板 佛物臺 高麗 製衣文庫 燈具 香具類 經香 香具類 正價附にして  
御買物坐ながら自由自在

●佛具卸部

京都市三條 本舖 三法堂藤田總次  
通小橋西入

●小賣部

同市三條 振替貯 大阪一四二五九  
通大橋西入 三法堂佛具陳列場



川榮吉外六名(以上二時完結)  
參圓 島田一男 壹圓 鬼原エキ 參拾六錢  
石川まき 七拾五錢 廣田傳次外三名(以上  
第一、二、三回分)  
金四拾圓宛 鬼原積一郎 篠崎惣五郎 八圓  
宛 篠崎喜作 森由藏 六圓 白石太一郎  
四圓宛 鬼原俊夫 廣田文作 白石萬平 篠  
崎文吉 四圓八拾錢 鬼原源太郎 貳圓宛  
大野ハツ 多田初太郎 森田道次郎 永島川  
たき 高山八太郎 鬼原安藏 壹圓六拾錢  
廣田國松 鬼原要藏 鬼原清香 壹圓四拾錢  
鬼原竹松 壹圓廿錢 森田巳之助 高山金藏  
關屋てる 壹圓宛 鶴澤源治 鬼原角藏 田  
中多孫彦 八拾錢宛 水島川政平 山本喜太  
郎 森田牛藏 鬼原勝藏 森田廣藏 高橋亦  
郎 鬼原積三郎 森田吉藏 關大吉 渡邊大  
三郎 關屋芳三郎 鶴澤初太郎 鶴澤實松  
鶴澤與市 小倉トヲ 關屋太郎 成川寅吉  
關屋次郎次郎川ハツ 關屋常吉 六拾錢宛  
關屋源市 鬼原吉藏 山崎四其左衛門 吹野  
カヲ 渡邊松之助 内海熊藏 五拾錢宛 關  
屋五郎次 四拾四錢宛 山本秀造 森川市藏  
關屋幸藏 四拾錢宛 森儀一郎 小高仁太郎  
山本三五郎 石井卯之松 内海村司 森田定  
吉 山崎キヲ 篠崎徳太郎 鬼原伊三郎 篠  
崎タマ 竹二錢 高山いち 三拾錢宛 森田  
キヲ 四圓五拾錢 關屋明外三十六名(以上  
第一、二回分)金四圓 篠崎俊 參圓 關屋  
五六 貳圓宛 篠崎彌八 篠崎辨次 壹圓宛  
多田嘉吉 今梅吉 山崎榮吉 鬼原沖藏 三  
枝健次郎 六拾錢宛 篠崎留吉 若菜常次郎  
山崎清次 鬼原百次郎 山本巳之吉 藤村文

藏 五拾錢 宮田泰倫 四拾錢 篠崎兵三郎  
高山源次郎 森五其七 三拾錢宛 高橋大次  
郎 高山清藏 吹野金藏 山本源三郎 加藤  
正松 齋藤七太郎 篠崎力造 壹圓五拾錢  
吹野善藏外七名(以上第一回分)

生徒募集(若干名)  
一學科 宗學及普通科とす  
一食費 全部補給す  
右希望者は四月十日迄に履歷書  
を添へ申出べし  
京都寺町二條妙満寺中  
實習學舎

橘香集

大僧正本多日生祝下著  
大僧正本多日生祝下講述  
特製皮金文字入美本  
金六拾錢  
複製クロカス文字入  
金貳拾錢(郵税二錢)

法華經講演集 序說 如來壽量品  
洋裝美本 正價五錢 郵税四錢

本書は佛陀觀宇宙觀人身觀等の絶對開顯統一の意義を  
闡明にし本佛の大慈活躍し日蓮主義の光輝燦然たり日  
蓮主義者の一讀を薦む

毎月一円十五日發行、一部金六錢 郵税五厘 一ヶ月前金六拾  
五錢郵税六錢 代金、振替貯金口座東京一三一九番へ繰込マレ  
タシ此場合ニハ送料ノ外三金費錢ヲ添付相成度候

發行所 統一團  
東京市淺草區北清島町十四番地  
發行所 統一團  
東京市淺草區北清島町十四番地



# 弘 告

四月一日午前十時二十五分  
 村雲尼公様大森御着車  
 御宿院池上本門寺へ

四月三日午後一時於池上本門寺大客廳  
**村雲婦人會臨時總會**

四月五日午後一時より  
 村雲婦人會御親教

四月二日より六日まで五日間  
 池上本門寺開堂供養

四月七日午前九時五十七分大森御發車横濱へ  
 四月七日、八日、九日、於佐藤別莊及横濱常清寺  
 横濱支部總會及御親教

四月十日午前十時二十分横濱御發車、東神奈川  
 を經て甲府へ

四月十一、十二日於若尾庭園及甲府遠光寺  
 甲府支部總會及御親教

四月十三日甲府御出發  
 身延山御參拜 (御一泊)

三月  
**村雲婦人會**  
 (電話番町 二三七二)

# 統一



第 二 百 六 號

宇宙第一の寶典に就て  
 僧 正 野口日主  
 御消息文と日蓮上人の人格  
 文學士 國友日斌  
 佛子の自覺 僧 正 今成乾隨

**立正安國 論綱要** 本多日生  
 兒童教育と宗教心  
 權僧正 井村日咸  
 淺草公園と現代人要求の人物  
 三上義徹  
 光 風 錄 布教師 笹川眞應

●各地教報

## 日蓮宗聖典

日蓮宗管長 旭日 苗師序 柴田一能師編  
 顯本法華宗管長 本多日生師序 山田一英師編

製本五寸一分横三寸六分  
 紙上等紙全支總一ナ  
 一冊上特製本金銀裝三本金  
 一冊上特製本黒色紅色緑金文字  
 一冊上特製本カロス銀金文字  
 一冊上特製本銀金一圓七十錢  
 一冊上特製本銀金一圓五十錢  
 一冊上特製本銀金一圓廿錢  
 一冊上特製本銀金一圓十錢

貳千部限 極上特製一圓四十錢 特製一圓二十錢  
 り 特價並 製九 十 錢 郵税各濟國朝鮮臺灣  
 八 錢 郵税太各濟國

本書内容は經典部祖書部に分ち如來攝化の總要  
 を明にし人生の歸趣を指導せる唯一の要典にし  
 て國民必讀の聖典也其裝幀の高雅なる携行に使  
 なる價額の低廉なる本宗出版界のレコード破り  
 也本書は信する人と未だ信する能はざるの人と  
 を問はず敢て本書を一讀すべきを薦む。

發行所 東京巢鴨町二ノ三五  
**無我山房**  
 振替東京三二二二番